



[事務局からのお知らせ]

彙報

第一回理事会(5月19日開催)での決定事項を受け、5月28日付で通信による臨時評議員会が開催されました。審議・報告事項は以下のとおりです。

- ・加地伸行会員、興膳宏会員の顧問推薦について
投票の結果、両会員を顧問に推薦することを決定。後日会員ご本人の受諾を得て、正式に就任(平成19年4月1日付)が決定しました。
- ・日本中国学会賞受賞者の決定についての報告
哲学・思想部門
白井 順『『朱子訓蒙絶句』は如何に読まれたか——朱子学の普及と伝播の一側面——』
文学・語学部門
佐藤浩一『仇兆鳌『杜詩詳註』の音注について——万を超す音注が意味するもの——』
(ともに、『日本中国学会報』第58集掲載)
- ・新入会員の承認
第一回理事会で決定した新入会員(通常会員37名、準会員1機関、賛助会員2社)の入会が承認されました。

また、10月5日の評議員会における報告及び決定事項は次のとおり。

[報告事項]

- (1) 平成20年度学会報編集担当校、学会展望担当校、大会開催校について
『学会報』編集担当校 大阪市立大学

学会展望担当校

哲学/北海道大学
文学/東北大学
語学/神戸市立大学
京都大学

大会開催校

- (2) 日本学会会議関係報告

[議決事項]

- (1) 平成18年度決算報告について
- (2) 平成19年度予算案について
- (3) 会員動向の確認及び新入会員の承認について
- (4) 論文執筆要綱の一部変更について
- (5) 顧問推薦規定について
- (6) 新入会員入会紹介の際の内規について
- (7) 『学会報』の電子アーカイブ化について
- (8) 創立60周年事業について

翌10月6日の総会において、評議員会の議決事項が報告されました。

◎会費の納入について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2ヶ年(平成18・19年度)未納の方には、本年度の『学会報』を送付いたしていません。また、4年間滞納されると除名になりますので、ご注意ください。郵便為替口座：00160-9-89927

◎退会の通知、住所変更について

退会ならびに住所・所属機関等の変更の際は、速やかに事務局へお知らせください。お知らせは書面かファックス、もしくは振替用紙の通信欄にてお願いします。

中国、山東大学での集中講義雑感

理事長 池田 知久

今年8月24日～9月18日の26日間、中国に赴いた。私の近年の海外出張としては、比較的長期にわたるものとなった。

日本中国学会の大会が10月6日・7日の両日名古屋大学で開かれ、その前日の5日には理事会・評議員会が開かれるので、学会のみなさんにご迷惑をおかけするのではないかと恐れつつ、緊急事態が発生した場合の連絡方法を講じた上で出かけさせていだいた。以前から決まっていた計画で、キャンセルすることはできなかったのである。

8月24日～30日は、蘭州の甘肅省文物考古研究所訪問と敦煌見学である。色々収穫は多かったが、ここでは省略する。9月15日～18日は、山東大学で開かれた3大学（日本の大東文化大学、中国の山東大学、韓国の成均館大学校）共催のシンポジウム「面向世界的東方思想」に参加、部会の司会と論文発表を行ったが、これも省略。

その中間の8月31日～9月14日の間、山東大学文史哲研究院（大学院）で集中講義を行った。

タイトルは「中国哲学史研究的方法論——当代日本之探求——」。1回につき3時間の講義を、ほぼ1日おきに合計8回、講義した。使用言語については、私が日本語で話し、日本、東京大学で博士号を取った曹峰教授が中国語に通訳してくれたが、誤訳箇所や難解な部分は私が中国語で補足・修正した。出席者は、第1回が約20名、第2回が約30名、第3回～第7回が数名、第8回が50名以上、という具合で一定していない。夏休みの終わった9月1日からは通常の授業が一斉に始まっており、学生たちはそちらの授業を睨みながら、私の集中講義にも顔を出していた。その上、講義の対象は、大学院生であるが、学部学生も聴講に来ており、中には日本語学科

の学生も交じっていて、どのあたりに焦点を合わせて話せばよいのか戸惑う、何ともやりにくい講義であった。ただ、数名の博士課程の大学院生が最初から最後まで休まず出てくれたので、それがこちらの励みになった。他に、日本から山東大学に留学に来ていた大学院生と学部学生各1名も、大体のところ出席していた。また、文史哲研究院の傅永軍院長・李生平副院長・鄭傑文教授などの何名かの教授が、それぞれ1、2回ずつ臨席されてはなはだ恐縮したが、後に聞いたところでは出席している学生たちを激励するためであったという。

さて、この集中講義は、山東大学側の、中国哲学史研究の方法論を講義してほしいという要求に、応じたものである。（始めは「中国思想史……」としていたが、中国人学生に親しみやすくするという理由で、「中国哲学史……」となった。）しかし、中国思想史の方法論というものを、一般的抽象的な理論として話すのは私には荷が重すぎるし、またさして興味も引かなければ、有意義とも思われなかった。そこで、私にもできることで、興味もあり有意義とも思われる内容に変えてもらったが、これには山東大学側も格別異存はなかった。——明治より21世紀に至る近代・現代日本の中国思想・中国思想史の研究の中で、実際に生きて用いられた各種の研究方法を取り上げて、それらを一つ一つ批判的に解明しながら、自分にとってのあるべき方法を模索してみる、というように変えた。すなわち、自らの中国思想・中国思想史研究の方法論の模索という観点から、近現代日本の中国思想・中国思想史の研究史・学説史を批判的に総括してみる、ということにしたわけである。

準備した講義の要綱は、400字詰め原稿用紙で124枚分。その全てを第2回までに配布し、第8回の最

終回ではほぼ全体を話し終えることができた。内容は、中国人学生が聴いて自らの方法論を検討していく上で参考にしてもらうことを考えて、なるべく明治以来の日本の研究史だけでなく、辛亥革命以降の中国の研究史にも多く触れたけれども、しかしその批判的解明には学生の間に心理的抵抗があったようである。(その背景には、近年中国で強まっているナショナリズム・パトリオティズムがあると思われる。)そして、第3回からは、毎回講義の合間に20分~30分の時間を取って、2、3名の学生に質問を出してもらいそれに答えて詳しく説明するというやり方で進めた。これによって、現代中国の学生(特に博士課程の大学院生)の理解や反応について多くのことを知りえた。

山東大学の大学院生の理解力・思考力などの学問的能力を客観的に測ることなどは、この程度の体験では到底覚束ないけれども、中国の重点大学の一つであるから、やはり優秀な大学であり大学院生なのではなかろうか。特に、最後まで残った数名の博士大学院生の能力は瞠目に値するものがあった。

と言うのは、私が講義で重点的に取り上げた方法論の問題の一つに、いわゆる「疑古」「信古」の問題がある。周知のとおり、現代中国では新出土資料の大量の発見・公表に伴って、李学勤の『走出疑古』などといった書が世に現れ、かつて顧颉剛らが『古史辨』に拠って唱えた「疑古」を批判して、古典文献の記載をそのまま事実であると信ずる「信古」が盛行している。その結果、堅実な文献批判には「疑古」のレッテルが貼られて、まともな文献批判がほとんど影を潜めてしまったのである。横目で世界の仏教研究やキリスト教研究の文献批判が、依然として高い学問的厳密さを保持しつつ進められているのを瞥見すると、我が中国古典研究にはいささか心許なさを感じざるをえない。

私の考えでは、そもそも学問というものは、自然科学であれ人文・社会科学であれ、自らの使用する研究資料の性格を批判的に検討すること(textual criticismとhigher criticism)抜きに、成立することはありえない。この資料の批判的検討は、別に「疑

古」とか「信ずる」とかいった問題ではなく、学問であろうとする限り、どんな研究者でも真っ先に行わなければならないイロハ中のイロハである。したがって、それを行おうとしない「信古」は論外であるけれども、「疑古」にもその言葉や理論に私としては満足できないものがある。

こういう視角から、近現代日本におけるいわゆる「疑古」の系譜を、実は「疑古」ではなかったし当時から「疑古」と呼ぶこともなかった、正しくは文献批判であると言って紹介した。中国では、近代日本の「疑古」として久米邦武・白鳥庫吉・津田左右吉などがよく知られているが、いわゆる「疑古」(=文献批判)は江戸時代からすでに始まっており、明治以降もまともな研究者は誰でもいわゆる「疑古」(=文献批判)である事実を、何度も詳しく説明したわけである。

上記の博士大学院生は、これをよく理解してくれた。山東大学には『文史哲』という有名な学術雑誌があり、国内外に相当の影響を持っている。現在の編集長は、文史哲研究院の王学典教授。同編集長の編集方針の下に、『文史哲』は2005年ごろから、李学勤とその『走出疑古』や「信古」に対する学問的な批判、顧颉剛らの「疑古」と『古史辨』の研究成果の継承のための、論文・記事を継続的に掲載している。中国国内に関する限り、その反響はかなり大きいようである。博士大学院生の理解の背景には、実は以上のような背景があったのである。

大分以前から、文革収束後の中国の中国思想史研究の水準が上昇しつつあり、やがて日本の研究を凌駕するであろうと囁かれてきた。私のような外国人を講師に招聘して、集中講義を行わせるという開放ぶりを直接体験して、本当にそうかもしれないと肌で実感したことであった。

「儒蔵」日本編纂委員会とその事業

東方学会理事長 戸川 芳郎

一昨2005年秋、中国・北京大学「儒蔵」編纂中心（代表：湯一介教授）より、東方学会の私（戸川芳郎）あて、日本におけるその編纂事業の協力について申入れがあり、それを受けて「儒蔵」日本編纂委員会を組むこととしました。

「儒蔵」編纂については、別添新聞記事（「日本経済新聞」06・7・29-省略）のように、以下の企画・規模の事業です。

一、「儒蔵」編纂事業とは

・「儒蔵」編纂は、2005年12月に中国・教育部の許可を得て始まった、国家的プロジェクトである。

二、編纂対象・編纂計画

・第一次：「儒蔵」精華編（1.5億字、2005～2010刊行）

先秦～清末の代表的儒学典籍460部。および韓国・日本・ヴェトナムの漢文体で撰述された重要な儒学典籍50（～100）部。

・第二次：「儒蔵」大全編（15億字、2010～2010刊行）

先秦～清末の代表的儒学典籍約5000部

三、体例について

・繁体字、縦組み、校点・校勘・標点・分段を施す。校点・校勘・標点・分段の具体的な「凡例」については資料参照。

四、統括者・事務局

・プロジェクトの統括者は、北京大学・湯一介教授であり、統括事務局は北京大学「儒蔵」編纂中心に置かれている。

「儒蔵」編纂中心：

〒100871 北京大学逸夫楼5323室

Tel. 8610-62767810、8610-62767811

Fax. 8610-62767811

事務局秘書：楊韶蓉 ruzang@pku.edu.cn

五、参画している機関、編集委員・顧問

・現在、中国国内では24大学・2研究機関が参画。機関ごとに分担する分野を持ち、一機関に1～3名の委員を置いていて、各機関と協議書を取り交わしている。

・編集委員84名（北京大学18名、国内大学52名、台湾4名、国外10名—日本：稲畑耕一郎・興膳宏・橋本秀美）。100人程度まで増員する予定。

・顧問11人（日本：戸川芳郎、韓国：柳承国、仏：汪德邁ほか）。

六、経費について

・「儒蔵」編纂の経費は、中国教育部・国家社会科学院基金・北京大学・寄付金によって賄っている。

日本側の作業に関しては、文献・底本の選定と校点・校勘・標点・分段等の原稿作成にかかわる作業は、日本側がこれを負担する。組版・印刷・製本等の編集作業は、北京大学「儒蔵」編纂中心がこれを負担する。

湯一介教授（北京大学哲学系）の申入れを受けた私は、現在その顧問に当たっている二松学舎大学“日本漢文学研究の世界的拠点の構築”21世紀COEプログラムの、その事業当局（拠点リーダー・高山節也教授）に謀り、その「儒学典籍」の選定を試みました。

大島晃・長尾直茂・町泉寿郎（当COE事業推進担当者・同協力者）ら諸氏とともに、安井小太郎『日本儒学史』・倉石武四郎『本邦における支那学の発達』を参考にして、その該当する著者と著述を選び出し、編成を遂げました（A・B・C・D・Eの五表）。

結果は、著者では藤原惺窩(1561-)～竹添井井(1842-)、著述では経部を中心に四部に互りましたが、同時にその校訂・解題に当たる担当の候補までも書き添えました(C表)。

湯一介教授からの要請には、2006年9月末までに、日本側の編纂委員・顧問の名簿と「選定書目」(30～40種)の提供がありました。そして、その「儒蔵」日本編纂委員会の原案を示して、昨年9月18日づけで該委員の就任をお願いし、現在まで、二回の編纂委員会を開催しました。その議事の概要をご紹介します。

第1回「儒蔵」日本編纂委員会

- ・(06年10月8日(日)、日本中国学会大会〔大東文化大〕)
- ・精華編(40点)は、大全編(2020年完成予定)の計画を見据えて、研究者養成の可能な機関に依頼することとした。各書籍(D表)の分担者・協力者についての原案を、06年10月末まで提出のこと。
- ・底本および校勘資料選定—06年12月末まで。
- ・分担者の選任—07年1月末まで。
- ・稿本の作成方法—原稿作成作業(テキストの校点・校勘・標点・分段および解題)には、二松学舎COE事業として進行中の、日本漢文資料テキストDBのデータ入力テキストを活かし、二松COEが提供するテキストに修訂を加えるかたちで、原稿を作成する。
- ・事務局—財団法人東方学会事務局は、会議場所の提供・通信連絡についての援助を行う。資料複写等の編纂費用については、支出できない。

第2回「儒蔵」日本編纂委員会

- ・(07年10月6日(土)、日本中国学会大会〔名古屋大〕)
- ・委員
 - 〔顧問〕 石川忠久 興膳宏 戸川芳郎
 - 〔日本編纂委員〕 池田秀三 池田知久 市來津由彦 稲畑耕一郎 家井眞 ◎大島晃 金文京
 - ◎河野貴美子 小島毅 佐藤進 佐藤保 佐藤鍊太郎 土田健次郎 ◎長尾直茂 ◎町泉寿郎 松川健二 湯浅邦弘
 - 〔国外編纂委員〕 橋本秀美 ◎同実行委員

・執筆要項

1. 底本及び校本の選定について
 - ・担当する典籍の底本については、テキストデータをデジタル化する際に使用した、その原資料からの複写本を提供することができる。基本的には、版本など通行本を対象とするが、それ以外のテキストを底本とする場合は、実行委員会と協議のこと。また校本については、選定の上、実行委員会に報告する。
2. 原稿作成について
 - 1) 北京大学儒蔵編纂中心に提出する原稿には、原資料からの複写本に、校点・校勘・標点・分段にたいする指示を、赤字で直接記入する方法によって作成のこと。具体的な記入方法は、北京大学儒蔵編纂中心より提供の、別紙記入例を参照のこと。
 - 2) 出版の際には、本文の前に典籍とその撰者に関する「解題」を掲載する。その典籍の「解題」を執筆するには、日本語で可。中国文への翻訳は、北京大学儒蔵編纂中心で行う。
 - 3) CD-ROMは、校点作業時の検索用として、利用のこと。
3. 原稿提出について
 - 1) 提出期限
 - 原稿提出期限は、原則として以下のとおり。
 - 第1期分 2008年9月末
 - 第2期分 2009年3月末ただし、個々のテキストの性格や分量により、相応の配慮を必要とするものについては、実行委員会に協議のこと。
 - 2) 提出先
 - 作成原稿は、実行委員会にてとりまとめ、北京に提出する。その提出先は、「(財)東方学会「儒蔵」日本編纂実行委員会」あて。
 - なお、編纂委では、当初より、日本における「儒学典籍」綜覧とあるならば、ハングル混じりの朝鮮本も提出される以上、わが「魯論抄」のごとき抄物はもちろん、諺解ふうの龍頭本も加えて然るべし、の意見が出ています。本事業の、「儒蔵」大全編への拡大するのを

見通して、「準漢籍」・和文著述も対象として、リストに加えること、少なくとも「日本名家四書註釈全書」「日本倫理彙編」から「漢籍国字解」等の収書は加える。また日本に残る佚存書や「将来目録」は、世界遺産として、当然提供してよろしい。これらを編纂委・実行委の提案として、いま、本年12月1・2日（深圳）の「儒蔵」編纂委員会に提出することとしています。

※参考資料

第Ⅰ期：精華編（2010年完成予定）選定書目

伊藤東涯『周易経翼通解』18巻10冊、安永3刊

太宰春台『詩書古伝』34巻15冊、宝暦8刊

岡 白駒『詩経毛伝補義』12巻、延享2刊

仁井田南陽『毛詩補伝』31巻16冊、天保5刊

新井白石『国書復号記事』1冊、写・活

竹添井井『左氏会箋』30巻、刊

山井崑崙『七経孟子攷文』33巻、刊

〈林秀一〉『孝経述義』

伊藤仁斎『大学定本』1巻、正徳4刊

荻生徂徠『大学解』1冊、宝暦3刊

伊藤仁斎『中庸發揮』1巻、正徳4刊

荻生徂徠『中庸解』2巻2冊、宝暦3刊

伊藤仁斎『論語古義』10巻4冊、正徳2刊

荻生徂徠『論語微』10巻10冊、元文2刊

太宰春台『論語古訓』10巻5冊、元文4刊

『論語古訓外伝』20巻附1巻10冊、延享2刊

吉田篁墩『論語集解攷異』10巻4冊、寛政3刊

市野迷庵『正平本論語札記』1冊、文化刊

大田錦城『論語大疏』20巻、写

伊藤仁斎『孟子古義』7巻7冊、享保5刊

伊藤仁斎『語孟字義』2巻、元禄8刊

中井履軒『四書逢原（大学雑論・中庸逢原・論語逢原・孟子逢原）』写・活

佐藤一斎『四書欄外書（大学摘説・中庸欄外書・論語欄外書・孟子欄外書）』写・活

松崎謙堂『宋本爾雅校詁』1冊、写

山梨稻川『文緯』30巻、写

岡本況斎『説文解字疏』残本、写

伊藤東涯『古今学変』3巻3冊、寛延3刊

原念斎他『先哲叢談（正編・後編・続編・近世正統）』刊

蘆野東山『無刑録』18巻18冊、明治10刊

安積澹泊『大日本史賛藪』5巻、写・活

林 鵝峰『本朝通鑑』刊（本朝編年録、提要）

山崎闇斎『闕異』1冊、刊

貝原益軒『大疑録』2巻2冊、明和4刊

荻生徂徠『弁道』1冊、享保2刊・『弁名』2巻2冊、享保2刊

皆川淇園『名疇』6巻6冊、天明8刊

皆川淇園『問学挙要』1冊、安永3刊

三浦梅園『贅語』6帙14冊、天明6・文政12・天保2刊

藤原惺窩『文章達徳綱領』6巻 寛文13刊

林 羅山『羅山先生文集』75巻 寛文2刊（問対・序・題跋・雑著）

中江藤樹『藤樹先生遺稿』2巻、寛政7刊

林 鵝峰『鵝峰先生林学士文集』元禄2刊（西風涙露・序跋）

21世紀型日本中国学会への豹変を期待して

東京学芸大学 佐藤 正光

日本中国学会は、日本の中国研究者にとって何よりも精神的支柱と言うべき存在であり、日本中国学会なくしては中国研究の動態や水準を把握することや、海外の研究者に日本の研究状況を示すことが容易ではなくなる。実際、多くの若手研究者が、中国研究を志したときにまず入会を考える程にオーソライズ化した全国学会である。

期待が大きいだけに、多少の失望感があって、昨年の大会懇親会で役員の方に申し上げた話題がきっかけで投稿したのが本稿の動機である。なるべく意見に偏向のないよう、今秋に行われた大小の学会で若い方を中心に意見も聞いた上で、日頃から抱いていた考えを述べてみたい。なお、このような開かれた論議の場を与えてくださった学会役員、編集委員の皆様にご感謝申し上げます。

『日本中国学会報』第59集（2007年）学界展望（哲学）「はじめに」で市來津由彦氏は、80年代以降の社会変化を3点に集約し、（1）国家的な施策による中国の研究水準の急速な高度化、（2）電子媒体を利用した研究方法の変化、（3）教育・研究界の競争的環境（対費用効果、研究評価）と指摘し、これに対する施策として「過去の遺産を継承し将来へ再編する整理」、「研究のヴィジョン」、「それ以前の水準に対しての、その得られた事実や知見の射程の深さ」を掲げている。池田知久会長も「中国研究をとりまく困難の中で」（『日本中国学会便り』2007年第1号。以下、学会便りからの引用は学会HPによる。）の中でホームページ等の「一段階グレードアップ」、「我々の中国研究の国際的競争力・影響力を強化する」ことを施策として掲げ、「日本中国学会の組織的活動」としての取り組みの必要性を表明されている。ここに示された現状の認識は正しく、学会の向かうべき方向性も示されているように考えられる。しかし、実際の学会活動に立ち返ったとき、池田会長自身が「困難から抜け出す行動をまだほとんど起

こしていない」と認識されていることは事実であろう。

そこで、本稿ではこのような問題意識に対する幾つかの具体的施策を掲げた。その目的を端的に言えば、学会が会員にとってコーディネーター的役割を果たすことである。以下に現実的な観点を論点とし、若手研究者、中年層研究者にとって望ましい施策、学会周辺の広域層に対する施策を、市來氏の指摘を踏まえながら述べてみたい。

1. 若手研究者に対する配慮

若手研究者に対する学会としてのこれまでの最も大きな貢献は、論文審査の精密さと学会賞の選定にある。興膳宏氏の「新体制の四年間」（『日本中国学会便り』2004年第2号）には論文審査向上のための苦心が記され、「日本中国学会便り」2006年第1号の学会報第58号に関する「五. 余録」にも査読者の数や審査への努力が示されており、これは学会の一大事業と言ってよい程の内容と実績であろう。

ただ、若手研究者に最も必要なことは研究へのサポートである。研究機関に所属していない研究者は研究者番号を持っていないため科研費の獲得はできず、共同研究やプロジェクトへの参加は関連する大学や研究者同士の交流関係に限られている。だが一方では、第58回大会のオムニバス講演会で片岡龍氏が、科学の専門主義による「専門化の進展に伴う問題に対応する可能性の一つに、共同研究という方法がある」（『日本中国学会便り』2006年第2号）と指摘しているように、困難な問題はありつつも今後の「研究のヴィジョン」として共同研究は重要な研究方法であり、的確な人材の確保こそ共同研究の生命線なのである。学会という組織を使えばその人材バンクの役割を果たすことができる。自己の研究上の関心、意欲、アピール点などを登録しておくことで、申請者がコンタクトを取る可能性ができる。人材バンクという点では、すでに大学の教員募集に多くの

学会ホームページが利用されている。

さらに、学会自体が科研費等の共同研究を構想し、實際上科研費申請の核となる会員に若手研究者を抜擢してもらうのである。こうした科研費や共同研究への能動的な取り組みが、若手研究者への大きな支援となるのではないか。

また現在、若手研究者は国際経験を豊かにするために自ら国際会議に参加しているが、現実には語学力や経験の不足で実効を上げていないのではないかと思われることも多い。日本中国学会が他国の学会との共同主催による国際学会を、若手育成の意図や企画を考慮しながら開催すれば、若手研究者の経験や知見を広めることができよう。

2. 中年層研究者に対する配慮

学会では評議員の数を増やしたことにより、中年層からも役員が出るようになった。これによって今まで以上に、委員会活動等で前向きな取り組みが行われている。とりわけデータベース管理委員会が学会誌発表論文等の電子媒体化を推進していることは特筆に値する。しかし、『日本中国学会報』は中年層の場合、すでに二十年分位は自分で持っている上に大学図書館等に備えられている場合も多い。電子媒体化は便利ではあるが、それ以上に必要なのは学界展望のデータベース化である。大学に所属している研究者は科研費の申請を恒常化され、研究業績を評価される一方で、入試やオープンキャンパス、学生指導に忙殺されており、若手研究者がインターネットを駆使して集めるようには、自身の研究の関連論文を網羅することが難しい。学会が学界展望をデータベース化すればその都度検索ができ、国内資料についてはほぼ把握できる。また世界中の論文について検索できるリンクが構築できれば、市來氏の言われる「それ以前の水準に対しての、その得られた事実や知見の射程の深さ」を持つことが可能になるのではないか。

共同研究について、中年層の場合は人的交流により人材バンクの必要性は少ない。だが、大学や地域による人間関係の固定化は否めない。より革新的な共同研究に学会が能動的に関わるのであれば、やはり共同研究の構想を学会が打ち出し、それに参画する研究者達によって科研費を申請するプロセスを作り出すこともあってよいのではなからうか。

大学教員でもある会員にとっては、後進を育成することも重要な役割である。学会としてはこれまで学生指導に対する支援は行ってきたであろうか。関清孝氏は「R-25」のつぶやき—大学院生から—（「日本中国学会便り」2004年第2号）の中で大学院生として率直な学会発表の感想を「当日は、ひたすら原稿を読み上げ、残りの時間はなんとかやり過ごそうとする」と記している。実際のところ全国大会の場で原稿を棒読みすることは、研究者としてのプレゼンテーション能力を向上させる努力を怠っていると言える。もちろんそれは指導教授の責任の範疇であるけれども、それを容認しているのは学会の問題であるとも言えないであろうか。しかし、関氏は次のような2点の重要な指摘もしている。一つは「資料の作成は有意義な議論がおこるように工夫することを心がけた」であり、もう一つは「“日本”中国学会であるのだから、われわれ院生が発表するのではなく、学者として脂ののりきった先生方の学術発表が中心になるべきではないか、それをもっと聞きたいとか、そのような方々が発表・討論してこそ、斯界のトップである学会のあるべき姿なのではないか」と述べ、さらに「この先の中国学の進むべき方向性をしめすことができこそ大会での発表なのではないか」という指摘である。前者は、ベテランの研究者に対して、発表意図を汲み取り、教育的意義をも有する質問を期待しているということであろう。そのためには、実質二、三人程度しか質問のできない今の発表体制では多角的な指摘もアドバイスもできず、その期待に応えられていないのではないか。また後者の指摘は、学会の教育的側面という意味で重い意味を持っている。研究者としては同等であっても、期待に応えるべき必要性は認めるべきであろう。役員は研究者としての業績を評価すればこそ選ばれているのであるから、評議員がまず積極的に発表することが捷径であろう。

3. 学会周辺の広域層への配慮

これまでは学会内のことについて述べてきたが、学会としては斯学分野における社会的責務、使命を有している。つまり他分野の研究者、大学で教育を受ける学生、漢字漢文教育に関わる中高生、教養を求める社会人といった学会周辺の広域層に対する配慮である。最も貢献していると考えられるのは、学

会員の研究成果の状況をほぼ網羅した「学界展望」であろう。近年、各部門の分類に「書誌」、「民間文学・習俗」、「日本漢文学」、「比較文学」、「教育・学習」等が加わり、関心を持つ層が拡大したであろうことは認めるべき点である。また「日本中国学会便り」は学会の動向、提案、呼びかけ等、学会内外に向けてアピールの役割を果たしている。

とはいえ、その内容は中国研究にのみ偏っていると言わざるを得ない。大会の際に、会員同士の雑談や情報交換で交わされる主要な話題は、研究だけでなく教育の問題も大きく、会員にとって関心のある事柄なのである。前引の池田会長「中国研究をとりまく困難の中で」冒頭でも述べられているとおり、学科の縮小、合格ラインの低下、興味の喪失は重要な問題である。そればかりでなく、講義、演習の水準や内容、広領域分野の授業への対応など、大学教育についての問題への関心は会員と学会間に温度差がある。こうした問題に対するシンポジウム、研究会等のアクションは学会として求められるべきことではなかろうか。

中高教科書に関わっている会員にとって、とくに訓読は重要な問題である。中国文学研究者の中には訓読不要とか、自由な訓読を唱える者もあるけれども、中高の教員は圧倒的に統一された訓読を求めており、この意識差は看過し得ない。学会がその方向性を誘導する必要まではないと考えるが、日本における訓読の意義や教育上の訓読の在り方等を考える機会は、学会として提供すべきではないかと考える。

さらに大きな責務と考えられるのは、オムニバス講演会における井上泰山氏の「中国と西欧諸国との文化交流の歴史を問い直すにあたって欠かせない作業は、西欧諸国に流出した漢籍の総量を把握することである」（「日本中国便り」2006年第2号）という提起である。膨大なデータを多方面で駆使できる有効な資料として蓄積できるようになった21世紀において、現在確認できる全ての資料をデータベースとして管理することは21世紀型の研究環境であると言えよう。井上氏は「学会としても、特別の漢籍調査プロジェクトチームを結成して、年次計画的に西欧に流出した漢籍所蔵調査に乗り出すくらいの意気込みがあっても好いのではないか」（同前）と提言している。

このような考えは、井上氏ばかりでなく二松学舎

大学のCOEプログラムを紹介した佐藤保氏も言及している。佐藤氏は「日本漢学の基礎とも言うべき漢籍や国書などの漢字文献の整理とデータベースづくり」（「日本中国便り」2004年第2号）をプログラムの柱の一つとし、さらに「京都大学人文科学研究所や東京大学東洋文化研究所等で大規模に行われている漢籍（中国書）のデータベースづくりからは漏れている部分、すなわち日本人の漢文による著作物を対象にしている点で、正しく中国学と日本学の狭間に属する部分を埋めたい」とその特色を提示している。東大、京大の大型プロジェクトや二松のCOEもデータ集積の方法であり、学会がその責務を担う必要はないが、地元の漢籍所蔵機関や所蔵者と関連を持つ全国の学会員に調査をコーディネートするとか、それらの成果を集約することは決して不可能な事業ではないと考える。これが市來氏の言われる「過去の遺産を継承し将来へ再編する整理」に通ずるものではなかろうか。

最後に、一般社会に対する配慮について。これもオムニバス講演会で岩波書店の馬場公彦氏が出版業界における中国関係書の不振の理由を挙げた中で、学会に対して次のように述べている。「中国との学会交流や研究者の往来、大学間の単位交換・留学生交流などの提携はますます活発になっているが、学術界の国境を越えた活動や成果が学会内部のみで消費されていて、一般読者への関心に応えていない。いわば社会的貢献の不足。」（「日本中国学会便り」2006年第2号）馬場氏は講演で、この点を強く訴えたとも述べている。

以上のように、日本中国学会が提供した会報等に基つきながら現状に対する提起をしてきた。我々研究者は、学会だけに責任を負うわけではなく、所属する大学や科研費による研究、その他のプロジェクト等にも責任を負っている。従って、学会に全ての責任を感じる必要もない代わりに、全ての責務を期待する必要もないのである。しかし、教育・研究・大学経営に忙殺される多くの学会員にとって、学会が能動的に我々の研究の場を用意し、研究の材料を与えてくれたら、本当にありがたいことである。それが理想的な学会の姿であるかどうかはわからないが、21世紀初頭における研究者の一人としては、求められるべき学会の在り方であると考えられる。

中国語学研究『開篇』

早稲田大学 古屋 昭弘

『開篇』は1985年12月に早稲田大学文学部中国語学研究班の名のもと始まった雑誌である。実は東京都立大学人文研究科の院生時代にガリ版刷りの同名の雑誌があった。1979年12月創刊。同人は「中文系水滸伝読書会」の池本和夫・金子真也・氷上正・水谷富次の諸氏と編集発行人の古屋である。誌名は蘇州の説唱芸能「彈詞」の前座的一曲を意味する術語に由来する。その背景には、編集発行人の、蘇州語ないし呉語への傾倒があった。第3号で終わってしまったその雑誌の名を、同人諸氏の許可を得て、早稲田でも引き継がせてもらうことにした。

その第1号から第5号までは、大学付近の印刷屋にコピー印刷と製本を依頼（第2号からは『開篇』編集部の名のもと出版）、第6号からは早稲田鶴巻町の好文出版（尾方敏裕社長）に刊行を委託、今に至っている。最初の頃は不定期刊で1年に2回出したり、出さない年があったりしたが、第18号からはほぼ年一回発行のペースとなっている。第4号から「中国語学研究」の6字を冠している。前座の段階が終わったら「開篇」の2字をはずして早稲田大学中国文学会の機関誌『中国文学研究』と並ぶ存在にしたいと思ってのことである。総目次については、第10号と第20号に附したほか、早大中文のホームページに載せてある（ただし現在工事中）。

著者原稿をそのままオフセット印刷するという方式を今でも採用しているため、レイアウトが不統一で恐縮ながら、最近号（第26号）まで通覧してみるとコンピュータ、ワープロの目覚しい進化をみることができる。たとえば創刊号では秋谷裕幸・木津祐子・笹原宏之の諸氏と古屋は手書き、山崎直樹氏のみ16ドットのワープロを使っている。その後ワープロを使う人が増え、今では厄介な音声記号や難字を手書きする必要もほぼなくなった。

第4号に中国の研究者として始めて石汝傑氏が投稿してくれたのを皮切りに中国やその他の国からの投稿も増え、今では毎号半数ほどを占めるに至っている。これとは反対に、『開篇』に載った文が『中国語文』に転載された例もある。内容的には中国語史と方言が中心となっている。以下、大雑把ながらその内容を分類しつつ回顧してみたい。

文字学では甲骨文字、春秋戦国文字、則天文字、小篆や隸書、俗字、字書では説文解字、龍龕手鑑、正字通などに関するものがある。

上古音関係では音素体系、声調、複声母、「合韻」「音転」、漢藏比較や学説史などの問題が扱われ、中古音関係では、切韻、王仁昫切韻、広韻、集韻、礼部韻略、説文解字篆韻譜、經典積文、玄応一切経音義、慧琳一切経音義、文鏡秘府論、悉曇藏、爾雅音図などの資料が取り上げられた。個々のテーマとしては、刪山韻と黠錯韻との対応関係、重紐、梵漢対音などがある。近世音関係では四声通解、賓主問答私擬、西儒耳目資、音韻正訛、重刊老乞大諺解、拍掌知音、蒲松齡日用俗字、満文金瓶梅、日清会話辞典などが研究対象となったほか、元代大都の雜劇の押韻に関するものもある。

文法関係では定州漢墓竹簡・論語、搜神記、世説新語、賢愚経、齊民要術、白居易詩、游仙窟景徳伝灯録、元朝秘史、司牧安驥集、水滸伝、老乞大、西遊記、楊家府演義、金瓶梅、醒世姻縁伝、三言、三国志玉璽伝、岐路灯、聊齋俚曲集などが研究対象となり、古漢語の使動用法、助動詞「足」、「却」の副詞化、蒙漢対訳文献における「有」などが扱われたほか、「了+否定詞」、V得、V教(O)C、V令C、V著O、V倒、V有NP、V得有(NP)、V将Cなどの文法構造が分析された。個々の語句としては「弄、任人、贖脚、生魚片、木屐、席地而坐、朱門酒肉臭、

泰山地獄、溝港、睡覺、禿禿麻食、饅頭、云何、開心、疆場、力巴兒、一磨兒、駒」などが分析されている。

現代語関係では二重名詞句構文、名詞の編入、受動態、類別詞、待遇表現、アスペクト、接尾辞「子」、「朝、向、往」(介詞)、「里、中、内」、「都」(副詞)などに関する文が収録されている。

そのほか、声調発生論、声調の音声的特徴、Metathesis、情報の剰余性、謝罪発話行為のコンテキスト制約のような理論的なものや、文學書官話、東本願寺の中国語教育、中国語教授法、中国語音声学など、教育史や教授法に関するものもある。

なんと言っても大きな比率を占めるのは、現代方言の音声・文法・語彙および方言史(古呉語の再構、閩祖語など)に関する文である。河北・遼寧・山東における声調、内蒙古の晋語、寧夏方言、呉語の連続変調、処衢方言と甌江方言、湘南土語、浙江畲語、粵北土語のようにある程度広い地域を扱ったもののほか、個々の地点としては、北方・西北では北京、宣化、襄垣、西安、靈武(回族)、靈宝、獲嘉、甘肅秦安五堂、山東では嶧城、单県、博興、博山、平邑、栄成、安徽では黟県(宏村)、樅陽、桐城、江浙では泰州、贛榆県石橋郷、贛榆県青口、揚州、蘇州、上海、紹興、奉賢、義烏、長楽、平陽、海塩、蘭溪、楽清、台州、温州、瑞安、湖南では湘潭など、閩粵地方では厦門、潮州、広州、香港、粵北惠東、粵西懷集、広西三江六甲、広西三江桂柳、土拐語、客贛方言では江西の安福、万載、広西の陸川、香港の新界、湖南の平江などがある。

オーソドックスな学術雑誌に載りにくいもの、たとえば文献目録や索引、あるいは語料や同音字表を重視することも『開篇』の特徴のひとつである。いくつか挙げてみれば(以下敬称略)、目録関係では、吉池孝一「呉語文献目録稿」、佐藤喜之「モンゴル関係中国近世語研究論著目録稿」、遠藤光暁「中国語の言語習得と言語障害研究文献目録」、野間見「閩語研究文献目録」、西田文信「声調関連文献目録稿(欧文編)」、張渭毅「1978年-2001年上半年近代漢語語音研究論著目録」、船田善之「『元典章』読解のために」、語料や方言会話資料としては、石汝傑「揚

州評話記音」、徐菊秀・陳為璋ほか「南京方言資料—南京白話」、樋口勇夫「山西省太谷方言資料」、Richard VanNess Simmons「杭州曲芸資料」、秋谷裕幸「杭州方言資料会話篇」、大嶋広美「梅県客家語会話」、竹越美奈子訳「Cantonese Primer」、「訓世評話」の翻字転載など、同音字表では山東の掖県方言(顔峰)、福建の連城方言(項夢水)、福建の沙県蓋竹方言(鄧享璋)、陝西の神木方言(邢向東)などがある。波多野太郎「元曲疏証」や井上治・金度亨「蒙語老乞大(ローマ字転写と和訳)」のような連載物もある。

1989年からは単刊として専著や索引を出すことになった。そのほとんどが各著者の自費出版なのだが、著者の方々からの支援の一つの形として、ありがたく「開篇単刊」と銘打たせて頂いている。以下に列挙する：岩田礼『中国江蘇・安徽・上海両省一市境内親屬稱謂詞的地理分布』、石汝傑・陳榴競『山歌索引』、遠藤光暁『翻訳老乞大朴通事漢字注音索引』、鱗澤彰夫『燕京婦語』、錢乃榮『杭州方言志』、渡部洋『劉智遠諸宮調語彙索引』、曹志耘『嚴州方言研究』、石汝傑『呉語讀本』、平田昌司主編『徽州方言研究』、丁鋒『球雅集』、大西博子『蕭山方言研究』、曹志耘・秋谷裕幸・太田斎・趙日新『呉語處衢方言研究』、林璋・佐々木勲人・徐萍飛『東南方言比較研究—寧波語・福州語・厦門語の分析』、樋口勇夫『臨汾屯里方言研究』。内容的には方言関係、特に呉語に関連するものが多いが、『燕京婦語』のように生粋の旗人北京語を反映した資料もある。

今日まで22年間も継続できたのは偏に投稿者諸氏と支援者のおかげである。平山久雄・慶谷壽信両先生、水谷誠・遠藤光暁両氏を始めとする諸先輩や友人、中国および他の国の研究者諸氏、早稲田大学の同僚を始めとする方々からの声援に心から感謝したい。この場をお借りして今後のご支援についてもお願いする次第である。

なお2001年11月に『開篇』が日中学院倉石武四郎賞をいただく栄誉に浴したことを附記しておきたい。

各種委員会報告

[大会委員会]

竹村 則行

日本中国学会第59回大会は2007年10月6-7日の両日、名古屋大学で開催された。研究発表31名に加え、塩村耕・余英時両氏の講演があり、更に図書館で青木正児展が開かれるなど、盛り沢山の内容であった。好天に恵まれ、地下鉄の開通など地の利も得て、幸いに多くの参加者があった。杉山寛行代表以下、関係者のご苦勞に改めて感謝申し上げます。

人によって異なるであろう今大会の感想を、一会員として以下にメモする。

- 一、発表者年齢や発表内容はほぼ均衡が取れていたが、古代哲学・唐代文学が多く、語学・当代文学がやや少なかった。
 - 二、発表の専門化の為か、質疑が必ずしも好調でなく、司会者の苦心が目立った。
 - 三、学会存在の理由の一である会員との交流は、現今の中国学を取り巻く問題その他について、1年ぶりの意見交換を経て、普段の孤立者が大いに力づけられた。
 - 四、静謐な環境にある名大が羨ましい。
- 大会委員会で話し合われたことの概要は次の通りです。
- ①第61回大会開催予定校から、阿川修三氏に本委員会委員に入らせていただく。
 - ②大会開催校に交付される学術大会運営費の使用内訳を明らかにしておく。
 - ③特に大会委員会の助言を必要とすると思われる今後の開催校に対して、適切な助言を積極的に行う。

次回2008年60回記念大会は京都大学、09年61回大会は文教大学です。

[論文審査委員会]

土田 健次郎

10月6日、大会開催中の名古屋大学において、2007年度第1回論文審査委員会を開いた。

[報告事項]

I. 学会報第59集の発行

おおむね順調に進んだ。

II. 学会報第60集依頼論文の執筆者

以下の各氏に依頼し承諾を得た。人選に関しては、5月19日の2007年度第1回理事会で承認済みである。

哲学・思想部門 大島 晃 (評議員)

中西久味 (一般会員)

文学・語学部門 須藤洋一 (評議員)

山口 守 (一般会員)

III. 日本学術振興会奨励賞の推薦者

前年度と同じく、論文審査委員会が主体となり評議員の意見を徴しながら推薦者の決定がなされた。その結果、今年度は宮紀子『モンゴル時代の出版文化』をはじめとする一連の業績を学会として推薦することが5月19日の理事会で承認された。なお、前年度推薦者の齋藤希史(『漢文脈の近代』をはじめとする一連の業績)も今年度の選考の対象となる。今年度受賞者はまだ発表されていない。

[審議事項]

I. 掲載論文電磁気録複製化の件

「論文執筆要領」の「その他」に以下の文言を加えることになった。

「18. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信する

こと、またその際に必要と認められる範囲の
改変を行うことがある。」

II. 委員会日程

第2回委員会 2007年1月27日(日)

(在京委員のみ) 査読者・閲読委員選定

第3回委員会 2007年3月30日(日)

第60集掲載論文・学会賞選定

III. 不採用論文に対する通知

不採用論文に対する通知の内容について継続
して議論することになった。

[出版委員会]

川合 康三

7月22日(日)、二松学舎大学において第一回
出版委員会を開催し、学会展望の原稿を委員全員
が読んで検討しました。

10月6日(土)、名古屋大学において第二回委
員会を開き、今後刊行予定の「学会便り」につい
て掲載記事を決定しました。また『日本中国学会
報』第59冊について、担当校から刊行までに生じ
た問題を提起していただき、今後の課題を話し合
いました。今年度は論文審査委員会との提携を深
めたために例年になく原稿が早く集まり、順調に
進んでいたのですが、途中から印刷所のペースが
落ちて、結局間際の刊行となりました。また、担
当校が誤植の訂正を指示したにもかかわらず、直
されていないという箇所もありました。これにつ
いては、印刷所に対して出版委員長から書翰を呈
して今後の改善を求めることになりました。

「学会便り」は会員の方々に開かれた場です。
こんな記事を読みたい、こんな文を書きたいとい
うご希望がございましたら、どうぞ出版委員会ま
でお寄せください。

[研究推進・国際交流委員会]

藤井 省三

今期の研究推進国際交流委員会は、以下の委
員・幹事により構成されています。なお()内
に新任・留任・専攻・所属などを記しました。

藤井省三 委員長(委員留任、文学、東京大学)

金 文京 副委員長(委員留任、文学、京都大学)

吾妻重二 委員(新任、哲学、関西大学)

古屋昭弘 委員(新任、語学、早稲田大学)

松村茂樹 委員(新任、文学・芸術、大妻女子大学)

王 俊文 幹事(新任、文学・芸術、東京大学大学院生)

本委員会はこれまでEメール会議を数回、大会
時の本会議を一回開きまして、以下のような問題
に取り組んできました。

(1)『日本中国学会報』バックナンバー滞貨問題 の解決方法

以前より、本委員会では『学会報』在庫問題に
取り組み、海外研究機関への寄贈を行いました。
これまで台湾、ドイツ等に4件の寄贈を行ったも
のの、この半年以上は寄贈の要請が全くありま
せん。

そこで以下のような提案を理事会に行う予定
です。

- ①学会便りとホームページで期限を一年に限り、
会員に一冊500円(送料込み、郵便切手によ
る納入可)で頒布すると公告する。
- ②一年経過後に、資料・学会事務に必要な若干
部数を除き、リサイクル処分を行う。

なお本学会最大の知的財産である『学会報』を
最大限活用するという観点から、寄贈の要請がな
くとも中国など数箇所の海外研究機関に送付する

という意見が最後まで出されていた点を、付記しておきたい。

(2)「日本哲学系諸学会連合 (JFPS)」への取り組み方

2005年に「新体制」として始まった第20期日本学術会議には、30の「分野別委員会」が設置されており、人文学系の委員会には「哲学委員会」「言語・文学委員会」などがございます。その哲学委員会は哲学、宗教、思想系六学会（日本哲学会・日本倫理学会・美学会・日本印度学仏教学会・日本中国学会・日本宗教学会）に呼びかけ、学術会議との新たなパートナーシップの促進母体として「日本哲学系諸学会連合」（略称 JFPS）を設立しました。同連合は公開シンポジウムの共同開催、および FISP（哲学諸学会国際連合）への加盟・協力を目的としています。

10月6日開催の本委員会では、日本学術会議連携会員であり同連合にも詳しい砂山稔会員にご出席頂き、同連合設立の経緯と今後の展望に関してお話しをうかがいました。その上で、中国に関する人文学振興、中国学の成果の日本国民・地球市民への還元、そして日本学術会議への関与強化の一環として、「日本哲学系諸学会連合」に中国学会も積極的に関与するという答申をまとめ、翌日の理事会で報告しました。

[選挙管理委員会]

神塚 淑子

10月6日、大会開催中の名古屋大学において、2007年度第1回選挙管理委員会を開きました。主な審議事項は以下のとおりです。

1. 平成17・18年度選挙管理委員会からの引継ぎ事項となっている投票数確保のために10名連記を外すか否かについての検討を行いました。10名連記を義務ではなく権利にしてはどうか、10名ではなくもっと少ない人数の連記にするのがよいのではないかなど、様々な意見が出ましたが、この問題は十分に議論を尽くす必要があります、さらに検討を続けていくことになりました。
2. 来年度実施される平成21・22年度役員選挙のうち、6・7月に実施予定の評議員選挙に関する作業日時と場所について確認しました。

[将来計画特別委員会]

堀池 信夫

○平成19年4月より、新たな将来計画特別委員会が発足した。委員は以下のとおりである。

堀池信夫（委員長）、佐藤鍊太郎（副委員長）、浅見洋一、大形 徹、大地武雄、野間文史、三浦秀一、宮本 徹（幹事）

○第一回将来計画特別委員会

(平成19年6月16日於本郷学士会館)

- ・将来計画特別委員会の役割説明。
- ・顧問推薦規定について。5月19日に理事会で承認、10月の評議員会へ。
- ・社団法人化問題。法未整備につき、秋ごろ以降、課題となること。
- ・大学入試(漢文/中国語教育)問題。
- ・高校の漢文科目単位数減少に関し、全国漢文教育学会の文科大臣宛要望書への賛同を理事会に提案することになった。
- ・中国研究・教育/古典研究・教育の落ち込みに対して、中・長期的展望を将来計画委員会で議論することになった。
- ・東洋学・アジア研究連絡協議会の報告。
- ・ICANAS-39の現状報告。
- ・新入会員の入会紹介の際の内規(条件の整備)につき、案文を作り理事会に提案することになった。

○第二回将来計画特別委員会

(平成19年10月6日於名古屋大学)

- ・顧問推薦規定の評議員会での承認が報告された。
- ・新入会員の入会紹介の際の内規(条件の整備)の理事会での承認が報告された。
- ・高校の漢文科目単位数の件に関し、全国漢文教育学会の文科大臣宛要望書への賛同の理事会承認の報告、あわせて日本中国学会としての文書を出すことが理事会から要望されたことの報告、その文案起草等の打ち合わせが行われた。
- ・各委員から中国研究・教育/古典研究・教育の落ち込みへの認識と対応についてさまざまな方向から意見が提出され、このことを今後さらに深めることとした。

[ホームページ特別委員会]

渡邊 義浩

I. HPの運営・更新

今年度より設置されたホームページ特別委員会は、ホームページの作成と更新、学会諸事業の予告と案内、各種委員会の議事報告、電子メールによる照会・問い合わせの窓口対応、中国学関連のホームページへのリンク、データベースの作成・管理・公開などをその職務と定められている。なかでも、主目的であるホームページの作成と更新に関しては、つねに最新の情報を提供することを心がけ、頻繁の更新を行うようにしている。また、海外への情報発信のため、英語版・中国語(繁体字・簡体字)版を更新したほか、韓国語版を新設した。

さらに、国内への情報発信として歴代開催校を掲げたほか、中国学関係学会・研究会情報を新設した。現在は宣伝不足のため、掲載する情報は少ないが、積極的な情報提供を受けて、中国学に関わる学会や研究会が、いつどこで行われるのか、ここを見れば分かるようにしていきたい。情報の提供は、学会のメールアドレス(ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp)まで、お寄せいただきたい。

II. 学会報の公開に向けて

学会報に掲載される中国研究の成果を時代のニーズにあわせて広く公開するため、学会報の電子化を開始した。

その最初の手続きとして、執筆者の著作権を侵害しないよう万全の注意を払って公開を進めていくため、電子化公開に関する許諾の意志を問う文書を執筆者に送付した。学会報に論文を掲載しながら、当方の手違いにより文書がまだ到着していない方は、お手数ながらお知らせいただきたい

(メールでも、斯文会館内日本中国学会宛手紙でも可)。

また、許諾の文書を返送されない場合には、ホームページ上に論文が公開されないほか、60周年記念事業として検討されている学会報 DVD に論文を取めることができなくなる。著作物の複製権と公衆送信権の行使を日本中国学会に可能な限り委託いただき、許諾の文書に署名・捺印のうえ、返送していただきたい。

なお、第59回大会の総会において、すでにご逝去されている方・退会されている方の論文も公開すべき、との意見をいただいたが、とくに前者の場合の著作権の処理が複雑となるため、現在のところ進める予定はない。したがって、公開される論文は、第1集から第58集までの約700本でいえば、約400本程度に留まる見込みである。

Ⅲ. 展望

著作権の許諾が取れても、すぐにホームページ上での論文の公開が始められるわけではない。多数の論文を掲げることによるサーバーの負担の問題や、最新号は当然公開しないとしても、何号までを公開すべきかという問題を検討しなければならないためである。本格的な公開開始までは、なおしばらく時間をいただきたい。

また、将来的には、学会展望に集められた論文のデータベース化を行い、検索システムをホームページ上で運用し、学会展望の論文を検索可能にすること、および、冊子体のほか、CD版の学会報をつくり、冊子体かCD版か両方かを選択できるようにすること、など行ってみたい事業は多い。どのような優先順位で行うべきか、ほかにどのような仕事があるのか。できあがったばかりの委員会であるため、会員諸氏のご意見をお聞かせいただきたいところである。



平成19年度学会員動向

●会員動向（平成19年12月1日現在）

総会員数1,969名、準会員数65機関、
賛助会員数8社

●本年度『学会便り』第1号発行以来判明した物故会員は以下のとおりです。

（敬称略）

東北地区	細矢 和夫	(2007. 1. 27)
関東地区	功刀 正	(2006. 2. 11)
	立石 廣男	(2007. 6. 9)
	新田 幸治	(2007. 8. 29)
	三浦理一郎	(2007. 3. 1)
近畿地区	上村 幸治	(2006. 7. 5)
	福嶋 昇	(2006. 9. 12)
中国・四国地区	三宅 正彦	(2007. 3. 23)
	深井 紀夫	(2007. 3. 25)
九州地区	横田 輝俊	(2007. 5. 15)
	柿村 峻	

●退会会員

○退会申出会員 27名

石井恵美子	井上 泰至	今村 隼人
王 勉	岡田 直子	岡本 天晴
加川 千章	河内 昭圓	河村 廣通
久保田 剛	佐藤奈津子	須川 照一
清宮 剛	高橋 泰幸	豊福 健二
舘野 正美	長尾 光之	畑中 優美
林田 剛	坂野 純子	樋口 義容
平木 真快	藤田 覚	星野 明彦
牧 克己	山寺未希子	楊 啓樵

○四年会費未納による退会会員 計43名

各務の責任員委員補選結果

●住所不明会員 43名

荒木ラン子	韋 海英	林 泰弘
市川 清史	武 宇林	植松 公彦
笈沼 恵一	応 雄	王 愿滄
岡林三千世	小川 貴宏	上妻 宗周
北村 良和	金 敬雄	高 仁徳
後藤 淳一	小林 忠輝	佐藤 貢悦
島津 京淳	清水 篤	周 先民
角田 達朗	関 浩志	薛 羅軍
竹内 良雄	谷津 康介	趙 立男
陳 洪傑	豊田 幸恵	中山 歩
白 小薇	堀田 洋子	堀江 智子
榎 高志	宮内 四郎	山田 史生
山本 透江	藍 恵子	李 彤
劉 静華	劉 柏林	林 松涛
和賀井 聡		

※上記会員の連絡先をご存知の方は、お手数ですが、事務局までご一報ください。

平成19年度新入会員一覧

10月5日開催の評議員会で入会が承認されたのは、以下のとおりです。

● 通常会員 19名

- 荒井 礼 関東地区 筑波大学(院)
〒270-0027 松戸市二ツ木1903 ツルハイム505
- 荒木 達雄 関東地区 東京大学(院)
〒123-0845 足立区西荒井本町2-13-16-203
- 尾崎順一郎 東北地区 東北大学(院)
〒989-3201 仙台市青葉区国見ヶ丘6丁目126-45
シャロームM101号室
- 片倉 健博 関東地区 日本大学(院)
〒110-0005 台東区上野1-17-4
- 金 文学 中国・四国地区 呉大学
〒731-2125 広島市佐伯区五日市駅前1-1-21-505号
- 黄 明月 近畿地区 京都大学(院)
〒520-2144 大津市大萱五丁目10番10号 コーポ源1号室
- 小林 春樹 関東地区 大東文化大学東洋研究所
〒356-0041 ふじみ野市鶴ヶ舞1丁目13番14号
- 佐々木 聡 東北地区 東北大学(院)
〒981-0935 仙台市青葉区三条町19-1
東北大学ユニバーシティハウス三条N638号
- 三瓶奈津子 関東地区 二松学舎大学(院)
〒301-0022 龍ヶ崎市南が丘3-5-10
- 下地早智子 近畿地区 神戸市外国語大学
〒651-2103 神戸市西区学園西町1-1-1
学園シティコート1011
- 鈴木 弥生 関東地区 東京大学(院)
〒204-0003 清瀬市中里2-642-32
- 竹内 航治 中部地区 名古屋大学(院)
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-10-1
ハイツ本山201号
- 田中 琴恵 中部地区 名古屋大学(院)
〒444-0823 岡崎市上地6-9-3
- 田中 譜美 中部地区 金沢大学(院)
〒939-8282 富山市今泉北部町1-5 市営住宅1棟902号室

陳 洲 中部 名古屋大学(院)
〒453-0014 名古屋市南中村区則武1丁目20-16
富美屋マンション303

花村 昭紀 中部地区 名古屋大学(院)
〒501-6232 羽島市竹鼻町狐穴3268-1

原田 信 関東地区 早稲田大学(院)
〒171-0033 豊島区高田1-20-2 ラルゴ西早稲田403

三橋佳奈子 近畿地区 京都府立大学(院)
〒558-0022 大阪市住吉区杉本2-25-2 北村様方

村田 みお 近畿地区 京都大学(院)
〒606-8301 京都市左京区吉田泉殿町5-1 荒木様方

● 準会員 2機関

京都府立大学附属図書館
〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町1-5

早稲田大学高等学院独中国語学科
〒177-0044 練馬区上石神井3-31-1

尚、以下の6月入会者については、本年度の名簿に掲載されています。

● 通常会員 37名

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 青木沙弥香 | 李 承律 | 池田 雅典 |
| 石黒ひさ子 | 益西 拉姆 | 市原 里美 |
| 伊藤 浩志 | 王 啓発 | 大淵 貴之 |
| 小野澤路子 | 甲斐 雄一 | 郭 穎 |
| 木本 拓哉 | 胡 慧君 | 寇 振鋒 |
| 黄 崇修 | 佐藤 礼子 | 嶋田 聡 |
| 島田 悠 | 須賀久美子 | 清野 充典 |
| 高橋 康浩 | 田中 良明 | 中嶋 諒 |
| 永塚 憲治 | 朴 在慶 | 橋本 陽介 |
| 林 雅清 | 原瀬 隆司 | 原田 愛 |
| 日比谷泰宏 | 水野 杏紀 | 宮武 環 |
| 横田むつみ | 吉田 薫 | 李 瑩 |
| 盧 濤 | | |

● 準会員 1 機関
筑波大学附属図書館

● 賛助会員 2 社

(株)好文出版

(株)燎原



名簿の訂正と委員の追加

● 名簿の訂正

本年度発行の名簿に誤りがございましたので、
謹んで訂正させていただきます。

ご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたし
ます。

1 ページ

論文審査委員会 (追加) ○大木 康

43 ページ

紺野 達也

所属: 二松学舎大 (院) → 早稲田大 (院)

電話: 048-922-3477 → 048-992-3477

80 ページ

萩原 正樹

所属: なし → 立命館大

● 委員の追加

大会委員会 阿川修三

日本中国学会 平成18年(2006年)度 収支決算書

(単位:円)

科目	予算	決算	概要
1. 前年度繰越	¥10,152,524	¥10,152,524	—
2. 会員会費	¥12,000,000	¥12,289,926	¥289,926
3. 寄付金	¥1,000,000	¥1,009,750	¥9,750
4. 預金利息	¥1,000	¥3,018	¥2,018
5. 著作権料分配金	¥0	¥23,000	¥23,000
合計	¥23,153,524	¥23,478,218	(A) ¥324,694

科目	予算	決算	概要
1. 事務局総務費	¥3,280,000	¥2,418,159	(1)~(7) ¥861,841
(1)印刷費	¥1,400,000	¥1,105,913	¥294,087
(2)通信費	¥1,000,000	¥784,020	¥215,980
(3)交通費	¥70,000	¥50,480	¥19,520
(4)消耗品費	¥200,000	¥41,816	¥158,184
(5)庶務処理費	¥100,000	¥807	¥99,193
(6)雑費	¥300,000	¥225,123	うち振込手数料¥145,480 ¥74,877
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会 ¥0
2. 事務局人件費	¥1,860,000	¥1,520,000	(1)(2) ¥340,000
(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000	¥0
(2)謝金	¥1,500,000	¥1,160,000	¥340,000
3. 事務局会議費	¥700,000	¥694,514	(1)(2) ¥5,486
(1)会議費	¥100,000	¥142,734	¥-42,734
(2)役員旅費	¥600,000	¥551,780	¥48,220
4. 事業費	¥8,000,000	¥7,306,316	(1)(2)(3)(4) ¥693,684
(1)学会報等刊行費	¥5,500,000	¥4,886,596	¥613,404
イ. 印刷費	¥3,000,000	¥2,581,016	学会報及び名簿 ¥418,894
ロ. 編集費	¥1,600,000	¥1,600,000	¥0
ハ. 翻訳謝金	¥300,000	¥280,000	¥20,000
ニ. 発送費	¥600,000	¥425,580	モリモト印刷業務委託 ¥174,420
(2)学術大会運営費	¥1,200,000	¥1,200,000	¥0
(3)マルチメディア事業費	¥500,000	¥419,720	¥80,280
(4)日本中国学会賞積立金	¥800,000	¥800,000	¥0

科目	予算	決算	概要
5. 各種委員会運営費	¥1,475,000	¥1,181,918	(1)~(6) ¥293,082
(1)大会委員会	¥15,000	¥14,650	¥350
イ. 通信費	¥5,000	¥4,650	¥350
ロ. 会議・旅費	¥0	¥0	¥0
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000	¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥5,000	¥0
(2)論文審査委員会	¥610,000	¥413,558	¥196,442
イ. 通信費	¥140,000	¥111,670	¥28,330
ロ. 会議・旅費	¥400,000	¥234,797	¥165,203
ハ. 謝金	¥40,000	¥40,000	¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥30,000	¥27,091	¥2,909
(3)出版委員会	¥330,000	¥387,723	¥-57,723
イ. 通信費	¥30,000	¥19,280	¥10,720
ロ. 会議・旅費	¥180,000	¥257,372	¥-77,372
ハ. 謝金	¥30,000	¥30,000	¥0
ニ. 会報編集費	¥80,000	¥80,000	¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥10,000	¥1,071	¥8,929
(4)選挙管理委員会	¥150,000	¥129,578	¥20,422
イ. 通信費	¥10,000	¥80	¥9,920
ロ. 会議・旅費	¥80,000	¥66,550	¥13,450
ハ. 謝金	¥40,000	¥61,000	¥-21,000
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥1,948	¥18,052
(5)研究推進・国際交流委員会	¥130,000	¥92,216	¥37,784
イ. 通信費	¥5,000	¥80	¥4,920
ロ. 会議・旅費	¥100,000	¥71,880	¥28,120
ハ. 謝金	¥20,000	¥20,000	¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥256	¥4,744
(6)将来計画特別委員会	¥240,000	¥144,193	¥95,807
イ. 通信費	¥5,000	¥870	¥4,130
ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥122,868	¥77,132
ハ. 謝金	¥30,000	¥20,000	¥10,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥455	¥4,545
1~5 予備費	¥15,315,000	¥13,120,907	¥2,194,093
合計	¥23,153,524	¥23,478,218	(B) ¥10,032,617
次年度繰越金		¥10,357,311	(A)収入差額+(B)支出差額
総計	¥23,153,524	¥23,478,218	

学会基金

基本金	4,300,000	基本金	4,300,000	備考	奥野基金	500,000
前年度繰越金	¥363,983	日本中国学会賞	¥80,000	支出の部	佐藤基金	200,000
日本中国学会賞積立金	¥800,000	次年度繰越金	¥1,087,951		池田基金	300,000
預金利息	¥3,247	合計	¥1,167,951		伊藤基金	300,000
信託収益金	¥721				積立基金	3,000,000
合計	¥1,167,951					

上記の通り、相違ないことを認めます。

平成19年5月15日

日本中国学会監事

安藤信彦
戸倉英美
松本肇

日本中国学会 平成19年(2007年)度収支予算案

(単位：円)

収入の部	科目	予算案
	1. 前年度繰越	¥10,357,311
	2. 会員会費	¥12,000,000
	3. 寄付金	¥1,000,000
	4. 預金利息	¥3,000
	5. 著作権料分配金	¥0
	合計	¥23,360,311

支出の部	科目	予算案
支出の部	1. 事務局総務費	(1)~(7) ¥3,280,000
	(1)印刷費	「発行」印刷・複製用紙印刷を含む ¥1,400,000
	(2)通信費	「発行」印刷用紙発送を含む ¥1,000,000
	(3)交通費	¥70,000
	(4)消耗品費	¥200,000
	(5)庶務処理費	¥100,000
	(6)雑費	振込手数料および材料費を含む ¥300,000
	(7)業務委託料	¥210,000
	2. 事務局人件費	(1)(2) ¥1,860,000
	(1)幹事手当	¥360,000
	(2)謝金	事務局専従謝金を含む ¥1,500,000
	3. 事務局会議費	(1)(2) ¥400,000
	(1)会議費	¥100,000
	(2)役員旅費	¥300,000
	4. 事業費	(1)(2)(3) ¥6,700,000
	(1)学会報等刊行費	イ~ニ ¥5,500,000
	イ. 印刷費	学会報及び名簿 ¥3,000,000
	ロ. 編集費	¥1,600,000
	ハ. 翻訳謝金	英文要旨作成 ¥300,000
	ニ. 発送費	¥600,000
(2)学術大会運営費	¥1,200,000	

支出の部	科目	予算案
支出の部	5. 各種委員会運営費	¥2,060,000
	(1)大会委員会	¥15,000
	イ. 通信費	¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥0
	ハ. 謝金	¥5,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000
	(2)論文審査委員会	¥630,000
	イ. 通信費	¥140,000
	ロ. 会議・旅費	¥400,000
	ハ. 謝金	¥60,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥30,000
	(3)出版委員会	¥400,000
	イ. 通信費	¥30,000
	ロ. 会議・旅費	¥250,000
	ハ. 謝金	¥30,000
	ニ. 学会便り編集費	¥80,000
	ホ. 消耗品・雑費	¥10,000
	(4)選挙管理委員会	¥65,000
	イ. 通信費	¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥30,000
	ハ. 謝金	¥20,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥10,000
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥130,000
	イ. 通信費	¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥100,000
	ハ. 謝金	¥20,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000
	(6)将来計画特別委員会	¥240,000
	イ. 通信費	¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥200,000
	ハ. 謝金	¥30,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000
	(7)ホームページ特別委員会	¥580,000
	イ. 通信費	¥10,000
	ロ. 会議・旅費	¥50,000
ハ. 謝金	¥20,000	
ニ. ホームページ管理費	¥500,000	
1~5	予備費	¥14,300,000
	予備費	¥9,060,311
	合計	¥23,360,311

学会基金

収入の部	基本金	4,300,000	支出の部	基本金	4,300,000	備考 (基本金内訳)	奥野基金	500,000
	前年度繰越金	¥1,087,951		日本中国学会賞	¥160,000		佐藤基金	200,000
預金利息	¥3,000	次年度繰越金	¥931,951	池田基金	300,000			
信託収益金	¥1,000			伊藤基金	300,000			
合計	¥1,091,951	合計	¥1,091,951	積立基金	3,000,000			

平成19年度 日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧

(単位：千円)

特定領域研究

- 東アジアにおける死と生の景観 6,400
敷 敏裕(岩手大学)
- 日中通俗文芸の体系化を目的とした先駆的研究—小説・芸能を中心論題として 3,100
勝山 稔(東北大学)
- 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—：総括班 26,700
小島 毅(東京大学)
- 歴史書編纂と王権理論に見る東アジア3国の比較 9,700
小島 毅(東京大学)
- 朝鮮思想と中国・ヨーロッパ—東アジア海域交流のなかで 4,800
川原秀城(東京大学)
- 宋元明における仏教道交渉と日本宗教・思想 5,900
横手 裕(東京大学)
- 宋代浙江の茶文化の研究—茶の湯文化の源流として 4,600
高橋忠彦(東京学芸大学)
- 寧波における知の営みとその伝統—学派・宗族・トポフィア— 4,500
早坂俊廣(信州大学)
- 五山文学における宋代詩文の受容と展開—詩文集の注釈と詩話を中心に— 6,300
浅見洋二(大阪大学)
- 儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成—日中における対照的研究— 6,200
中村春作(広島大学)
- 散楽の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究 5,400
加藤 徹(明治大学)
- 日記および文集に見える宋元時代の東アジア交流と両浙地域の社会、経済 6,200
遠藤隆俊(高知大学)
- 日本における中国古典文学の伝播とその展開に関する研究 6,800
静永 健(九州大学)
- 中国東南部の学術と図書の収集・出版・流通 4,300
高津 孝(鹿児島大学)

- 中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通—新儒教と医学思想の文献を中心に— 6,900
恩田裕正(東海大学)
- 中国科举制度からみた寧波士人社会の形成と展開 6,100
近藤一成(早稲田大学)

- 浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査 6,200
二階堂善弘(関西大学)

若手研究(B) 新規

- 哲学
 - 新出土文献による「忠」「孝」の思想の研究 600
前川正名(大阪大学)
 - 宋代春秋学の基礎的研究 900
松崎哲之(常磐大学)
 - 東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響—儒教規範に基づく家族制を中心に— 500
安部 力(北九州工業高等専門学校)
 - 版本と異なる日本古写経中の漢訳仏典研究—『五王経』『普賢菩薩行願讃』を中心に— 1,200
林寺正俊(国際仏教学大学院大学)
 - 敦煌唐代前半期壁画の総合的研究 1,500
西林孝浩(立命館大学)

文学

- 江戸時代中期における漢詩文の日本化の様相—日本人は漢詩文で自己表現し得たか— 600
中島貴奈(長崎大学)
- 一九四〇年代文学に見る「中国近代」の隘路 500
杉村安幾子(金沢大学)
- 民国初期における社会小説の研究 1,100
神谷まり子(国土館大学)
- 東方文化事業と中国人留学生に関する研究—陶晶孫を中心として 300
中村みどり(早稲田大学)

言語学

- 広東語の談話モダリティの研究 意味機能と音声の相関に着目して 1,000
飯田真紀(北海道大学)

若手研究(B) 継続

生活科学

- 小説類と挿図版画による明清家具とその使用様式の研究 800
高井たかね(京都大学)

哲学

- 易緯の新研究—漢代易学における緯書思想の展開と行方— 700
辛 賢(大阪大学)
- 『老子』の注釈史及び受容史を中心とした中国学術史及び思想史の研究 1,000
斎藤智寛(京都大学)
- 唐宋期における模倣の問題 500
志野好伸(明治大学)
- 近代中国における「社会」認識—思想史分析を通じて 600
川尻文彦(帝塚山学院大学)

- 同時代的視座からみた隋唐仏教の教学形成過程の解明 600
長谷川岳史(龍谷大学)
- 室町時代の中国文物の受容に関する調査研究 700
畑 靖紀(九州国立博物館)

文学

- 日本漢籍の本文形成に関する研究—五山版・古活字版を中心に— 600
住吉朋彦(慶應義塾大学)
- 近世前期文学における明末文化の影響 900
伊藤喜隆(湘北短期大学)
- 『元史』の志と表の再編纂—大元ウルスの政治と文化の解析— 1,000
宮 紀子(京都大学)
- 中国南方の祭祀芸能における神仙説話の研究 700
山下一夫(神田外語大学)
- 21世紀中国大衆消費社会における文学現象の研究 1,000
高屋亜希(早稲田大学)
- 武田泰淳と中国—さらなる他者理解の可能性を求めて— 500
郭 偉(立命館大学)

●戦後台湾社会における「日本語人」の文化活動及びその影響に関する研究 400
李 郁恵(立命館大学)

●「関東州」から「満洲国」までの中国側文化メディアにかんする通史的研究 1,000
橋本雄一(千葉大学)

●「満洲国」時期の文学に関する日中横断的研究 1,000
大久保明男(首都大学東京)

●中国西南ナン(納西)族の言語伝承および文字の研究 500
黒澤直道(国学院大学)

●1949年以前の中国映画界における外国映画の受容とその影響に関する研究 1,200
菅原慶乃(関西大学)

●民国期上海における伝統演劇の展開 600
藤野真子(関西学院大学)

●日本中世禅林における柳宗元受容の基礎的研究 1,000
太田 亨(広島商船高等専門学校)

言語学

●現代中国語における領属表現に関する研究 300
勝川裕子(名古屋大学)

●明・清期ドミニコ会による漢語研究 800
石崎博志(琉球大学)

●上中古漢語における機能語体系の通時変化のメカニズム—区域拡散の視点から— 700
松江 崇(北海道大学)

●19世紀中国語—朝鮮語対音資料の音韻論的研究 1,000
伊藤智ゆき(東京外国語大学)

●南宋・祝泌「聲音韻譜」の総合的研究 500
大岩本幸次(大阪市立大学)

史学

●東アジアにおける律令制儀礼の構造と展開 600
稲田奈津子(東京大学)

●北朝隋唐期における仏教団の宗教活動と中国の国家及び社会に対する影響の研究 700
高瀬奈津子(札幌大学)

●モンゴル帝国時代初期中国黄河流域支配の政治史・文化史的研究 535
櫻井智美(明治大学)

●中央アジア出土古代ウイグル語税役制度関係文書の歴史学・文献学的研究 1,300
松井 太(弘前大学)

●清末民国期、江南デルタ農村の地域統合と民間信仰に関する基礎的研究 600
佐藤仁史(滋賀大学)

●考古資料・石刻史料を用いた契丹(遼)仏教史の研究 1,200
古松崇志(京都大学)

●明清期における礼学と「社会における礼教の普及」に関する研究 700
佐々木愛(島根大学)

●古代東アジアの諸国家と道教に関する研究 800
小幡みちる(早稲田大学)

●戦後台湾における文化政策の研究(1945～2000) 1,100
菅野敦志(早稲田大学)

法学

●平安朝知識人の意識変化と社会変動—伝奇小説・物語の日唐比較を手掛りとして— 1,300
桑原朝子(北海道大学)

特別研究促進費

文学

●中世前期貴族社会における漢詩文の基礎的研究 600
仁木夏実(大阪大学)

研究成果公開促進費・①研究成果公開発表(A)

●東アジアの出版と地域文化 2,900
磯部 彰(東北大学)

基盤研究(S) 継続

言語学

●チベット文化圏における言語基層の解明 11,900
長野泰彦(国立民族学博物館)

史学

●東アジアにおける儀礼と刑罰—礼的秩序と法的秩序の総合的研究— 12,400
富谷 至(京都大学)

基盤研究(A) 一般・新規

文学

●五山版を中心とする中世刊本の研究—中世出版史の再構築に向けて— 7,500
落合博志(国文学研究資料館)

基盤研究(A) 一般・継続

情報学

●アジア古籍電子図書館の構築の研究 9,000
大木 康(東京大学)

文化財科学

●紙素材文化財(文書・典籍・聖教・絵図)の年代推定に関する基礎的研究 5,500
富田正弘(富山大学)

哲学

●両漢儒教の新研究 7,000
渡辺義浩(大東文化大学)

●〈醜〉と〈排除〉の感性論—否定美の力学に関する基盤研究— 6,700
宇佐美文理(京都大学)

史学

●中国文化の伝播、変容と還流—中国沿海地域と日本— 5,700
藤田高夫(関西大学)

●シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相 9,300
森安孝夫(大阪大学)

●東アジア史上における中国訴訟社会の研究 9,300
夫馬 進(京都大学)

●南北朝～隋代における石刻造像銘の調査及びその地域史的宗教環境の研究 6,400
佐藤智水(龍谷大学)

基盤研究(B) 一般・新規

情報学

●和漢古典学のオントロジモデルの応用 3,100
相田 満(国文学研究資料館)

地域研究

●近現代中国におけるリベラリズム思想の受容と展開 3,900
村田雄二郎(東京大学)

哲学

●日本中世期の経書学に関する基礎的研究 3,600
水上雅晴(北海道大学)

●中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性 4,200
船山 徹(京都大学)

●ボタラ宮所蔵ステイラマティの俱舍論注釈書『真義義』の新出梵文写本研究 5,200
小谷信千代(大谷大学)

- 「[「養の文化」]の比較研究をとおして見る「死」の表象の形成過程とその現代的変容 5,600
中村生雄(学習院大学)
 - 東アジアにおける文明の衝突と「天」の観念の変容 5,000
井上厚史(鳥根県立大学)
- 文学
- 和漢聯句の研究 5,200
大谷雅夫(京都大学)
 - 日本近世期における中国白話小説受容についての基礎研究 3,900
近衛典子(駒澤大学)
 - 戦時上海の文芸文化と邦字新聞「大陸新報」に関する多角的な研究 3,100
大橋毅彦(関西学院大学)
 - 文化大革命の文化史的再考 4,200
佐治俊彦(和光大学)
 - 東アジア(日本・中国・韓国)における歌謡の比較研究 6,200
真鍋昌弘(関西外国語大学)
 - 建仁寺両院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究 3,900
赤尾栄慶(京都国立博物館)
- 言語学
- 中国語の構文及び文法範疇形成の歴史の変容と汎時的普遍性—中国語歴史文法の再構築— 4,300
木村英樹(東京大学)
 - 中国語とその周辺言語におけるダイクシス 4,300
林 徹(東京大学)
 - 中国語と日本語の対照に基づく事象表現の総合的研究 4,900
沈 力(同志社大学)
 - 東アジア角筆文献の発掘とその交流の調査研究—醍醐寺蔵宋版一切経の調査を主— 5,900
小林芳規(広島大学)
 - 口語から見た北部フィリピン・台湾の少数民族世界に関する言語学的・人類学的調査研究 5,400
森口恒一(静岡大学)
 - 国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究 4,800
小助川貞次(富山大学)
- 史学
- 植民地期東アジア民衆諸宗教の伝播と交流—情報メディアの分析を中心に— 5,700
武内房司(学習院大学)

- 宋代社会経済史語彙解釈のデータベース化 6,300
斯波義信(財団法人東洋文庫)
 - 故宮博物院に収蔵される甲骨文の来源調査—未刊本『甲骨刻辞』の解読を通して— 2,100
東 賢司(愛媛大学)
 - 中国新疆のウルムチ・トゥルファン両博物館所蔵非漢文古文献の研究 4,200
梅村 坦(中央大学)
 - 中国老字号の研究—老舗の政治・経済・文化史— 3,400
津田芳郎(北海道大学)
- 社会学
- 中国における文化政策とポピュラー文化の変容 600
石井健一(筑波大学)
- 基盤研究(B) 一般・継続
- 情報学
- 中国近世白話文学の電子化状況情報及びコーパスの共有基盤の構築に関わる基礎的研究 2,200
笠井直美(名古屋大学)
- 科学社会学・科学技術史
- 中国古代技術書の研究—王禎『農書』を中心として— 3,600
田中 淡(京都大学)
- 地域研究
- 東北アジアにおけるユートピア思想の展開と地域の在り方についての総合的研究 2,500
山田勝芳(東北大学)
 - 漢字文化圏の「近代」に関する総合的研究 900
刈間文俊(東京大学)
 - 中国における政治社会的ガバナンスと制度形成に関する国際共同研究 5,100
小島朋之(慶應義塾大学)
 - 中国の新興活字メディアと世論 7,100
高井潔司(北海道大学)
- 哲学
- 宋学西漸—イスラムからヨーロッパまで— 1,700
堀池信夫(筑波大学)
 - 隋唐道教と文学 1,400
砂山 稔(岩手大学)
 - 戦国楚簡の総合的研究 2,800
湯浅邦弘(大阪大学)

- 科挙に関する文献学的総合研究 2,700
佐藤錬太郎(北海道大学)
 - 思想史的社会的史料としての科挙答案に関する基礎的研究 3,900
三浦秀一(東北大学)
 - チベット・ボタラ宮所蔵梵本『維摩経』に基づく総合的研究 2,500
多田孝文(大正大学)
 - 北京・天津を中心とした華北の廟会と祭祀組織「香会」の実態研究 1,600
櫻井龍彦(名古屋大学)
 - 中国西南部の巫教祭祀における儀礼過程と口承伝承の研究 1,700
森由利亜(早稲田大学)
- 文学
- 近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究 2,800
井上敏幸(佐賀大学)
 - 詩跡(歌枕)研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究— 1,900
植木久行(弘前大学)
 - 日中戦争と中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する総合的研究 2,700
小谷一郎(埼玉大学)
 - 20世紀東アジア文学史における村上春樹の研究 2,400
藤井省三(東京大学)
 - 中国近世戯曲文学の基礎的研究 3,800
赤松紀彦(京都大学)
 - 近現代華北地域における伝統芸能文化の総合的研究 3,700
水正 正(慶應義塾大学)
 - 中国同時代文学の潮流を概括するための基礎的研究 1,900
千野拓政(早稲田大学)
 - 南北朝楽府の多角的な研究 3,000
佐藤大志(広島大学)
 - 東アジア圏の歌垣と歌掛けの基礎的研究 2,800
辰巳正明(国学院大学)
- 言語学
- 言語記述と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究 1,000
沼田善子(筑波大学)
 - 古チベット語ユニオンデータベースの構築と解析—言語接触を中心とする多層構造の解明— 1,900
武内紹人(神戸市外国語大学)

- 中国寧夏における回族語に関する基礎的研究 2,300
張 筱平(愛知大学)
 - 19世紀「官話」の諸相—「周縁(ヨーロッパ・朝鮮・琉球・日本)」からのアプローチ 4,500
内田慶市(関西大学)
 - 日本漢字音データベース(大字音表)の再構築と実用化に向けての実践的研究 2,600
湯沢賀幸(筑波大学)
 - 台湾標準中国語話者の声調に進行中の音声変化に関する音響音韻学的・社会言語学的研究 1,000
上原 聡(東北大学)
 - 関東語福寧方言群の調査研究 1,400
秋谷裕幸(愛媛大学)
- 史学**
- 「青島函獲書籍」の復元と清末民国初における独英の対中国文化交流に関する比較研究 1,700
持井康孝(金沢大学)
 - 東アジア海域史研究における史料の発掘と再解釈—古地図・偽使史料・文学表現— 2,000
高橋公明(名古屋大学)
 - 在ベルリン・トルファン文書の比較史的分析による古代アジア律令制の研究 1,900
小口雅史(法政大学)
 - 日唐律令比較研究の新段階 3,100
大津 透(東京大学)
 - 「入唐求法巡礼行記」に関する文献校訂及び古代東アジア諸国間交流の総合的研究 3,000
鈴木靖民(国学院大学)
 - コロニアル都市・青島の形成と文化多重性に関する総合研究 2,900
森 紀子(神戸大学)
 - 墓より見た中国宋代の社会構造 2,500
平田茂樹(大阪市立大学)
 - 出土史料による魏晋南北朝史像の再構築 3,600
伊藤敏雄(大阪教育大学)
 - 近現代中国江南の総合的研究—近100年間の人材の政治経済的發展基盤 3,800
高田幸男(明治大学)
 - 東アジア仏教確立期における中国仏教石刻文物の資料的地域的研究 3,900
気賀沢保規(明治大学)
 - 英仏所蔵敦煌・吐魯番出土漢文文献の古文学史的比較研究 1,600
関尾史郎(新潟大学)

- 中国古医籍が日・韓・越の伝統医学形成史に与えた影響の書誌学的研究 1,200
真柳 誠(茨城大学)
 - コータン出土文書の総合的研究 1,300
荒川正晴(大阪大学)
 - 清代地方政府文書「南部県档案」の総合的調査・研究 2,100
唐澤靖彦(立命館大学)
- 社会学**
- 中国内漢族・モンゴル族・朝鮮族の言語文化変容に関する社会言語学的研究 2,000
李 守(昭和女子大学)
- 教育学**
- 魯迅『解剖学ノート』の解説に基づく、20世紀初頭の留学生教育に関する事例研究 3,900
鳥途健一(東北大学)
- 基盤研究(C) 一般・新規**
- ジェンダー**
- 近代中国における漫画の形成と漫画表象のジェンダー観点からの研究 1,300
坂元ひろ子(一橋大学)
- 哲学**
- 日本儒教に関する倫理学・倫理想史的研究—近代化論と比較思想史的研究の統合 1,100
高島元洋(お茶の水女子大学)
 - 「自然」と翻訳される諸概念間の差異に関する哲学的研究 1,300
山岡悦郎(三重大学)
 - 東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究 900
菅野孝彦(東海大学)
 - インド・チベット仏教の「心の宗教」としての伝統とその現代的意義に関する研究 1,000
吉村 均(財団法人東方研究会)
 - 明代教派系宝巻形成の研究—嘉靖萬曆の宗教故事の摂取を焦点に— 1,000
磯部 彰(東北大学)
 - 宋代道教儀礼書と現代台湾の道教儀礼 1,400
松本浩一(筑波大学)
 - 術数書と陰陽五行説の中世的展開 1,600
武田時昌(京都大学)
 - 永楽三大全の基礎的研究 700
鶴成久章(福岡教育大学)
 - 中国古代における太陽とロータスと鳥の図像的イメージと神仙思想 1,200
大形 徹(大阪府立大学)

- 術数書の基礎的文献学的研究 1,500
三浦国雄(大東文化大学)
 - 中国初期禪宗史と大乘戒運動 700
中島志郎(花園大学)
 - 隋唐時代における道観の基礎的研究 900
都築晶子(龍谷大学)
 - 柳詒徴とその周辺—東南大学知識人の發展的研究— 500
野田善弘(新居浜工業高等専門学校)
 - 『中観明句論註釈』の文献学的研究によるインド・チベット中観仏教思想史の再構築 1,000
吉水千鶴子(筑波大学)
 - 慧均「大乘四論玄義記」に基づく中国南朝仏教学の再構築 1,100
菅野博史(創価大学)
 - チベット仏教における「大中観」思想に関する研究 1,600
望月海慧(身延山大学)
 - チベット文献木版印刷プロジェクトの総合的解明 700
伏見英俊(関西大学)
 - 日本における靈籤・御籤・神籤をめぐる思想的展開に関する総合的研究 1,800
大野 出(愛知県立大学)
- 文学**
- 平安前期漢文書簡の表現受容に関する史的研究 800
西 一夫(信州大学)
 - 古代礼楽思想と勅撰和歌集の和漢比較研究 1,000
渡辺秀夫(信州大学)
 - 萬葉集における訓字の訓詁学的研究 1,000
内田賢徳(京都大学)
 - 高度経済成長期の社会と人間—中国との比較を通して 1,100
渡邊正彦(玉川大学)
 - 中国の伝奇小説と日本の物語文学に関する比較文化的研究 2,000
山本登朗(関西大学)
 - 収録字の配列方法より考察した中国辞書史の研究 700
花登正宏(東北大学)
 - 魏晋六朝文学における美と聖性 600
佐竹保子(東北大学)
 - 中国近代書論の文献学的研究 900
菅野智明(筑波大学)
 - 前漢書平話前集・後集の復元を通して見た全相平話 1,200
大塚秀高(埼玉大学)

- 日本現存朝鮮古刊本の調査とその語学的・書誌学的研究 1,100
藤本幸夫(富山大学)
 - 1920年代、北京を中心とした文学結社の活動 700
齊藤大紀(富山大学)
 - 明代詩養系文学の基礎的研究 1,800
高橋文治(大阪大学)
 - 口承性から見た漢代文学の研究 1,000
釜谷武志(神戸大学)
 - 戦国秦漢期の諺・歌謡・文学作品と物語—「テキスト」を核とした「語り」の展開— 900
谷口 洋(奈良女子大学)
 - 中国古小説の話題事項集成 1,300
富永一登(広島大学)
 - 湖北省の無形文化財「漢川善書」における聖諭宣講の継承発展に関する総括的調査研究 1,000
阿部泰記(山口大学)
 - 上海の歴史文化地図の改訂制作とその活用 600
木之内誠(首都大学東京)
 - 中国語文化圏における厨川白村著作の受容の再燃現象についての研究 1,300
工藤貴正(愛知県立大学)
 - 日中説話文学史構築のための『法苑珠林』『夷堅志』の比較説話学的研究 1,100
三田明弘(日本女子大学)
 - 唐代著述考 1,300
孫 猛(早稲田大学)
 - 韋君宜から見た中国革命史再構築の試み—作家、編集者、革命家の視点から— 1,300
楠原俊代(同志社大学)
 - スペイン国内に残る中国近世白話文献の学術的価値に関する研究 1,200
井上泰山(関西大学)
 - 申報掲載文戯劇評の研究 1,200
瀬戸 宏(摂南大学)
- 言語学**
- 清朝の言語政策と社会変動に係わる漢語の多層性に関する研究—公用語の脈流を視座に— 900
藤田益子(新潟大学)
 - 現代中国語における空間認識に関する体系的研究 500
丸尾 誠(名古屋大学)
 - 新調査データに基づくびん東区方言の下位分類の再検討 500
秋谷裕幸(愛媛大学)

- 中国西南部の民族文字の字形集合に関する情報理論的研究 1,100
鹿島英一(九州大学)
 - 北京新出資料から見る清代口語の諸相 1,300
落合守和(首都大学東京)
 - 音韻と文法のインターフェースからの中国語の類型的特徴の再検討 1,300
太田 斎(神戸市外国語大学)
 - アジア諸言語における喉頭特徴の相関 1,200
遠藤光暁(青山学院大学)
 - 「調点資料総目録平安時代編真言宗の部」の作成 1,500
月本雅幸(東京大学)
 - 日本語調点資料を国際的に共有するための標準の構築 2,000
小助川貞次(富山大学)
 - 近世漢文訓読語法の日本語史的研究 500
齋藤文俊(名古屋大学)
 - 『図書寮本類聚名義抄』凡例の構築 1,400
大槻 信(京都大学)
 - 正倉院文書訓読による古代言語生活の解明 700
桑原祐子(奈良女子大学)
 - 鎌倉時代における日本漢語の位相的研究 700
佐々木勇(広島大学)
 - 景頗語・日本語の主題マーカーの対照研究 1,300
張 麟声(大阪府立大学)
 - 中英語頭韻詩韻律研究—繰り返しの技巧と定型表 700
守屋靖代(国際基督教大学)
 - 中国話語者のための日本語教育文法の開発と学習者中間言語コーパスの構築 1,500
杉村 泰(名古屋大学)
 - 初対面コミュニケーションにおける話題管理スキーマに関する日米中韓対照研究 1,500
三牧陽子(大阪大学)
 - 中国語または韓国語を母語とする日本語学習者の敬語能力に関する実証的研究 2,000
宮岡弥生(広島経済大学)
- 史学**
- 遣唐使の特質と平安中・後期の日中関係に関する文献学的研究 1,000
森 公章(東洋大学)
 - 入唐僧慧萼の求法活動に関する基礎的研究 1,100
田中史生(関東学院大学)

- 日本中世禅宗の仏事法会と中国仏教 1,500
原田正俊(関西大学)
 - 西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究 1,100
荒川慎太郎(東京外国語大学)
- 文化人類学**
- 日本華僑社会における伝統文化の再構築と地元との関係 700
曾 士才(法政大学)
 - 20世紀前半に日本人が収集した中国民具についての文化人類学的研究 1,000
芹澤知広(奈良大学)

基盤研究(C) 一般・継続

科学教育・教育工学

- 中国語声調の言語学的・音響学的データを踏まえたインタネット利用の指導システム 600
比企静雄(早稲田大学)

科学社会学・科学技術史

- 漢訳西洋曆算書の基礎調査と近世国学者への影響に関する研究 1,000
小林龍彦(前橋工科大学)

哲学

- 清朝中国ムスリム学者・劉智『天法性理』における中国思想とイスラーム神秘主義 500
青木 隆(日本大学)
- 日本と中国の地理書の比較思想史的研究 500
薄井俊二(埼玉大学)

- 宋学形成前夜における仏教の動向に関する研究 500
中西啓子(新潟大学)

- 梁啓超の功利主義思想と章炳麟の反功利主義思想における日本の契機の比較考察 500
小林 武(京都産業大学)

- 本草の博物学と中国言語思想におけるパターン・モデルシステムの研究 1,000
石田秀実(九州国際大学)

- 懷徳堂学派の朱子学の研究—中井履軒の四書注釈を中心として— 500
藤居岳人(奈良工業高等専門学校)

- 唐宋心性思想に関わるデータベース構築の試み 700
坂内栄夫(岐阜大学)

- 六朝隋唐時代における仏教譬喩経類の受容と道教 700
神塚淑子(名古屋大学)
- ベルリン・トルファン・コレクションの漢語版本の総合研究 1,400
西脇常記(同志社大学)
- 五経正義の総合的研究 1,000
野間文史(広島大学)
- 「大戴礼記」に残存する「曾子」十篇についての基礎的研究 500
末永高康(鹿児島大学)
- 「洞神經」の基礎的研究 700
山田 俊(熊本県立大学)
- 『論語義疏』古抄本の研究 700
影山輝國(実践女子大学)
- 中国北朝後半期の仏教の類書『金藏論』の研究 1,100
宮井里佳(埼玉工業大学)
- チベット仏教における論理学・認識論の研究 1,100
白館戒雲(大谷大学)
- 日本における宋代風水思想の受容と展開に関する研究 800
鈴木一馨(財団法人東方研究会)
- 「日本思想史学」の成立に関する史的、対照的研究—東アジアの中で— 800
中村春作(広島大学)
- 東アジアにおける漢訳西学書の成立、伝播とその影響に関する思想史的研究 900
李 梁(弘前大学)
- 1930年代の東アジア(日本・朝鮮・中国)間の思想的葛藤と相互の関係 500
高坂史朗(大阪市立大学)
- 東洋的知に基づく「共生」思想の研究 1,500
竹村牧男(東洋大学)
- 中国イスラーム山東学派におけるスーフィー哲学の受容と変容の研究 700
松本耿郎(英知大学)
- 中井履軒の科学思想—その哲学・時法・解剖学 200
湯城吉信(大阪府立工業高等専門学校)
- 東アジアにおける釈迦を表した絵画の種々相と思想的背景の研究 800
渡邊里志(東海学園大学)
- 江戸前期儒教絵画に関する研究 700
守屋正彦(筑波大学)
- 民衆本としての中国・芸能脚本—ヨーロッパに所蔵される曲芸刊本の収集と分析 900
佐々木(井口)淳子(大阪音楽大学)

- 中華民国期上海のアマチュア組織活動と音楽消費の実態—国楽生成に焦点をあてて 1,600
尾高暁子(東京芸術大学)
- 文学
- 日本における詞の収集と整理 1,500
萩原正樹(小樽商科大学)
- 和刻本の制作—近世中期上方における明清漢籍の受容— 700
稲田篤信(首都大学東京)
- 上代文学における漢字使用の総合的研究 900
村田右富実(大阪府立大学)
- 国際交流の中の平安漢文学受容 1,000
佐伯雅子(人間総合科学大学)
- アジア文化との比較に見る日本の「私小説」—アジア諸言語、英語との翻訳比較を契機に 1,300
勝又 浩(法政大学)
- 中世における中国詩論についての基礎的研究 300
小野泰央(群馬工業高等専門学校)
- 唐宋古文の実用面に関する文体論的研究 500
東 英寿(九州大学)
- 詩人としての朱熹に関する基礎的研究—絶句表現の諸相を中心として— 1,800
宇野直人(共立女子大学)
- 1920~30年代北京・上海のメディア環境と文学界・文化界のネットワーク 800
清水賢一郎(北海道大学)
- 日本占領下(1937-1945)の上海文化状況に関する研究—話劇・映画を中心に— 600
邵 迎建(徳島大学)
- 身体性を軸とした中国近現代文化史構築のための超領域的研究 500
牧 陽一(埼玉大学)
- 一九三〇年代台湾文学における「大衆」とそのリテラシー 500
四方田(垂水)千恵(横浜国立大学)
- 江戸期における詩経解釈学史的考察 900
江口尚純(静岡大学)
- 中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究 900
浅見洋二(大阪大学)
- 中国広西の鍾乳洞内に現存する古代墨書跡の資料化とその総合的研究 700
戸崎哲彦(島根大学)
- 身体論的中国近代文化史研究 700
佐佐 徹(岡山大学)

- 中国近現代における『中国文学史』纂述に関する基礎的研究 500
竹村則行(九州大学)
- 中国古典戯曲総合データベースの基礎的研究 900
千田大介(慶應義塾大学)
- 台湾原住民文学および言語環境に関する基礎的研究 800
下村作次郎(天理大学)
- 中国民間演劇の再興—浙江省を中心として— 700
磯部祐子(富山大学)
- 日中戦争期における香港文学者と日本・中国文学者の関係図 1,000
西野由希子(茨城大学)
- 中国舟山の人形劇に見る口承文藝の研究—「説唐」故事を中心に— 900
橋谷(馬場)英子(新潟大学)
- 江蘇省東南部の伝統芸能と民間信仰をめぐる中国地域文化研究の試み 500
上田 望(金沢大学)
- 高行健を中心とした華文文学の総合的研究 500
楊 暁文(滋賀大学)
- 表音文字による中国語書写の歴史的研究 700
高田時雄(京都大学)
- 明清寓言の多様性に関する総合的研究 1,000
佐藤一好(大阪教育大学)
- 明清における非古の文体と家族・ジェンダー 900
野村結子(奈良女子大学)
- 白居易を中心とする中唐「風流」文学の展開に関する研究 500
諸田龍美(愛媛大学)
- 『金瓶梅』における話法・引用の文体論研究 500
中里見敬(九州大学)
- 新中国建国前後における伝統劇の多角的な研究 900
松浦恒雄(大阪市立大学)
- 敦煌文献中に見られる説話文学資料の基礎的研究 1,100
荒見泰史(広島大学)
- 中国現代詩における詩意生成のメカニズム 700
佐藤普美子(駒澤大学)

●『元朝秘史』研究における文学研究の構築—モンゴル英雄叙事詩研究を土台として—

900

藤井麻琳(愛知淑徳大学)

●元曲復元のための崑劇歌譜群蒐集及び研究—北京蔵本を中心に

1,300

石井 望(長崎総合科学大学)

言語学

●ミャオ・ヤオ諸語の歴史文法研究—特異現象の発生と伝播を中心として

1,100

田口善久(千葉大学)

●郝敬の音韻研究について—「毛詩原解」の音注の分析を中心とした研究—

500

富平美波(山口大学)

●『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字の研究

1,400

栗林 均(東北大学)

●中国東南方言資料による「文法化」に関する記述的研究

700

佐々木勲人(筑波大学)

●中国語普通話文法の形成及び多様性に関する基礎研究

500

町田 茂(山梨大学)

●ロシア所蔵ウイグル語文献の文献学的研究

1,400

庄垣内正弘(京都産業大学)

●台湾原住民諸語の普遍性と多様性に関する類型論的研究

900

片桐真澄(岡山大学)

●中国保安族の消滅の危機に瀕した言語、保安語積石山方言にかんする調査研究

600

佐藤暢治(広島大学)

●先秦両漢漢語の語法研究—二重目的語文・使役文・受身文の変遷—

1,400

小方伴子(首都大学東京)

●漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成

500

呼和巴特爾(昭和女子大学)

●訓読語詞の比較研究

900

春田晴郎(東海大学)

●ポストコロニアル香港におけるミックスコード(中英混合語)の意義と役割に関する研究

500

金丸秀美(東京理科大学)

●平安鎌倉時代における儀軌・次第訓点資料の漢文訓読語史的研究

500

松本光隆(広島大学)

●比叡山西塔北谷正教坊聖教を巡る訓点資料の基礎的研究

1,500

宇都宮啓吾(大阪大谷大学)

●和刻本『笑府』四種の流布状況および所収語彙等に就いての総合的研究

1,000

荒尾禎秀(東京学芸大学)

●漢語アクセントの史的・研究における基礎データの構築

1,000

兼兼(坂本)清恵(日本女子大学)

●東アジア言語の破裂音の相互類似性と言語習得への干渉

600

福岡昌子(三重大学)

●e-Learningに対応した中国語学習教材開発と自学自習促進

500

林 道生(静岡大学)

●第二言語学習の視点からの中国語辞書の検証

1,000

山崎直樹(大阪外国語大学)

●対面、遠隔、現地チュートリアル連携による中国語会話教育の高度化

800

村上公一(早稲田大学)

史学

●近代日本の仏教者における中国体験・インド体験

1,300

小川原正道(武蔵野学院大学)

●昭和前期日本の社会・文化史と台湾—台湾知識人精神史の記録化

900

大谷 渡(関西大学)

●張家山漢簡による中国漢代制度史の再検討

1,100

宮宅 潔(京都大学)

●清代中央官制の研究—内閣・翰林院・都察院を中心として—

600

黨 武彦(熊本大学)

●北朝樂制史の研究—「魏書」樂志を中心に—

500

渡辺信一郎(京都府立大学)

●「六朝貴族制」の学説的研究

500

川合 安(東北大学)

●明代出版史の定量的分析を可能にするための日本現存明版書誌研究

800

井上 進(名古屋大学)

●「雲夢龍崗秦簡」の注釈による秦史の再構成に関する研究

500

馬 彪(山口大学)

●19世紀中葉の中国南部における社会変動と宗教・民族—太平天国運動を中心に—

800

菊池秀明(国際基督教大学)

●敦煌・トルファン漢語文献の特性に関する研究

900

土肥義和(財団法人東洋文庫)

文化人類学

●中国東地域における無縁の死者祭祀の偏差・伝播・歴史の変遷に関する民俗学的研究

600

志賀市子(茨城キリスト教大学)

政治学

●改革開放期中国における思想・イデオロギー変動

600

砂山幸雄(愛知大学)

表象芸術

●日中の表象芸術に表れる死生観の比較文化的研究

1,000

諏訪春雄(学習院大学)

萌芽研究 新規

文学

●諡法に見られる人物評価意識の変遷

500

三上英司(山形大学)

萌芽研究 継続

哲学

●明治・大正・昭和初期の陽明学運動の基礎的研究

800

吉田公平(東洋大学)

●中国北朝墓誌中の同一刻法の分布に関する研究

500

澤田雅弘(群馬大学)

文学

●周辺書誌学からみる敦煌文書成書年代比定に関する研究

500

玄 幸子(関西大学)

言語学

●元刻文字資料による元代口語文法の再構築—古代・近代両漢語文法の統一的理解のために

1,000

小池一郎(同志社大学)

●日本語・韓国語・中国語の漢語語彙対照データベース作成のための基礎的研究

700

水野義道(京都市芸繊維大学)

●相づちによる発話種の交替についての研究—中・日両言語の対照から学習者言語へ—

700

楊 晶(お茶の水女子大学)

若手研究(スタートアップ) 新規

哲学

- 懐徳堂の「知」の生産—儒学を中心とした知識人の繋がり 1,210
池田光子(大阪大学)

言語学

- 中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究 1,320
山越康裕(札幌学院大学)

若手研究(スタートアップ) 継続

哲学

- 日中両国における「義・利」「公・私」思想の比較研究 1,410
于 臣(高根県立大学)

文学

- 六朝における生命の文学 1,390
稀代麻也子(筑波大学)
- 文学ジャンルの文体論的研究 1,390
久保昭博(京都大学)
- 二十世紀中国演劇における伝統劇の新作について 1,380
田村容子(早稲田大学)

- 五四新文化運動後の中国文学における自己表現の性的研究 770
大東和重(近畿大学)

言語学

- 日・中の生活世界における対面相互行為：言語・ジェスチャー・文化を見る 1,390
武黒麻紀子(早稲田大学)

史学

- 中世後期日明関係の展開と構造に関する基礎的研究—入明記の史料学的検討を中心に 1,290
須田牧子(東京大学)

文化人類学

- 現代中国における死の社会的布置—政策、習慣を解釈する人々の文化人類学的研究— 870
田村和彦(福岡大学)

奨励研究

哲学・芸術学

- 西夏文『法華経』のデータベース化および漢文・チベット文との比較対照研究 540
高橋まり代

外国語・外国文学

- 宝巻の受容と中国女性文化との関わりについての研究 540
辻 リン(早稲田大学)

史学

- 契丹国(遼朝)時代の契丹文字資料に関する調査と基礎的研究 760
武田和哉(奈良市教育委員会)
- 中国文明と地域文化の関係から見る魏氏高昌国の宗教と国家の研究 640
本間寛之(早稲田大学)

学術創成研究費

学術創成研究費 新規

- 目録学の構築と古典学の再生—天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明— 85,800
田島 公(東京大学)

研究成果公開促進費

学術定期刊行物

- 中国語学 900
日本中国語学会

学術図書

- 齊地の思想文化の展開と古代中国の形成 1,900
谷中信一(日本女子大学)
- 蔵漢訳『阿闍世国経』研究 500
佐藤(田中)直美(宗教情報センター)
- 康有為と近代大同思想の研究 1,900
竹内弘行(名古屋大学)
- 述書賦全訳註 1,500
大野修作(京都大学)
- 唐代天台復興運動研究序説—荆溪湛然とその『止観輔行伝弘決』 1,800
池 麗梅(国際仏教学大学院大学)
- 懐徳堂研究 1,800
湯浅邦弘(大阪大学)
- 劉智の自然学 1,100
佐藤 実(関西大学)
- 孝子伝図の研究 2,700
黒田 彰(佛教学院)
- 近世漢詩のアジアとの邂逅 1,400
森岡ゆかり(京都女子大学)
- 蕭紅研究—その生涯と作品世界 1,400
平石淑子(大正大学)

- 明代白話小説『三言』に見る女性観 900
張 軼欧(関西大学)
- 六朝の遊戯文学 1,800
福井佳夫(中京大学)
- 中国の詩学認識 3,300
浅見洋二(大阪大学)
- 元刊雜劇の研究 1,600
赤松紀彦(京都大学)
- 朝鮮漢字音研究 2,100
伊藤(高山)智ゆき(東京外国語大学)
- ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究 2,500
庄垣内正弘(京都産業大学)
- 土族語互助方言の研究 1,500
角道正佳(大阪外国語大学)
- 日本中世の仏教と東アジア 3,100
横内裕人(文化庁)
- 『烏臺筆補』の研究 1,400
高橋文治(大阪大学)
- ハラホト出土モンゴル文書の研究 3,500
吉田順一(早稲田大学)

- 聖フォニカバ伝 1,100
石濱裕美子(早稲田大学)
- データベース**
- 漢字字体規範データベース 8,100
石塚晴通(HNG)
 - 台湾総督府文書目録データベース 7,000
檜山幸夫(AGTDB)
 - 東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム 11,100
新波義信(ISMDLMS)
 - 新・全国漢籍データベース 11,300
井波陵一(KANSEKI)
 - 国際敦煌プロジェクト データベース 3,600
岡田至弘(IDP Database)
 - 古典籍総合データベース 32,600
白井克彦(KOTENSEKI)
 - 漢字字体変遷研究のための拓本文字データベース 7,400
安岡孝一(djvuchar)

学会展望へのご協力をお願い

『日本中国学会報』には毎冊、文献目録が載せられています。これは担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。執筆された御本人からのお知らせをお願いするゆえんです。

次号第60集（2008年10月刊行予定）には、2007年（平成19年）の文献目録を掲載します。2007年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

なお、昨年からの郵便による御報告は廃止しておりますので、E-mailでのみお知らせください。

論文も著書も1編、1冊ごとに、部門・分野をご記入のうえ、以下の該当する部門の担当者にお送り願います。

[哲学部門] 弐 和順
yuhazu@let.hokudai.ac.jp

[文学部門] 佐竹 保子
satakey@sal.tohoku.ac.jp

[語学部門] 佐藤 晴彦
qqf62279k@ray.ocn.ne.jp

各部門の分類は以下のとおりです。

- 哲学部門
- 一、総記
 - 二、先秦
 - 三、兩漢
 - 四、魏・晋・南北朝
 - 五、隋・唐
 - 六、宋・金・元
 - 七、明・清
 - 八、近現代
 - 九、琉球・朝鮮
 - 十、日本
 - 十一、書誌学
 - 十二、その他

- 文学部門
- 一、総記
 - 二、先秦
 - 三、漢・魏・晋・南北朝
 - 四、隋・唐・五代
 - 五、宋
 - 六、金・元・明
 - 七、清
 - 八、近現代
 - 九、民間文学・習俗
 - 十、日本漢文学
 - 十一、比較文学
 - 十二、書誌

- 語学部門
- 一、総記
 - 二、文字・訓詁
 - 三、音韻
 - 四、語彙
 - 五、語法
 - 六、方言
 - 七、教育・学習
(教科書は含みません)

○国内発行の刊行物に限ります。発表言語の種類は問いません。

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行の「学会便り」に載せることになっています。

2007年1月から12月までに開催されました国内学会の原稿は、来年（2008年）2月末日までに、下記宛にE-mail、または郵便（フロッピー同封）でお送り願います。

ktomina@hiroshima-u.ac.jp

〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3

広島大学文学研究科 富永一登



○「研究会の案内」記事募集

来年4月発行の「学会便り」（4月20日発行予定）には、各種研究会の案内を掲載する予定です。研究会の名称、開催日時・場所、連絡先などをお知らせ願います。

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中國學會

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。
ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用い、400字詰原稿用紙に換算した全体の枚数を第1ページの見易い場所に明記すること。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示すること。
ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。
校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。
原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字体（旧字）に統一する。
活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。
特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記すること。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いないこと。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあつては、ウェード式・漢語拼音方案等

何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例 孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。

日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付すること。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内 日本中國學會
14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第1ページに朱書すること。ただし、論文の内容により、両部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨とも複写コピーを用意し、計4部を提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。

校正

16. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負担とすることがある。

抜刷

17. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

その他

18. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）

（平成13年5月13日修正）

（平成14年10月13日一部修正）

（平成15年10月5日一部修正）

（平成19年10月7日一部修正）